

第24図 堅穴住居跡3号・出土遺物

接合作業を経て、118点が出土し、この内12点を図化した。28は、口縁部が外反して肥厚する。これを文様帶として、横位の貝殻刺突文と沈線文とが施文されている。29は口縁部文様帶の幅がやや狭い。横位の沈線文とキザミが施されている。30は波頂部をわずかに含む。口唇部に短い沈線を断続的に施す。口縁部の沈線文は、外面では直線的に、内面では曲線的に施文されている。31は口縁上端を欠損するが、断面三角形状に肥厚する。32と33は底部片である。33の外面にはケズリの痕跡が明瞭に残されている。34～37は台付皿形土器である。34・35は皿部片である。34は上端部が肥厚して施文が施され、35は内面に沈線文が施されている。36は脚部である。外面でわずかに屈曲している。37は脚端部が内側へ肥厚する。38は小

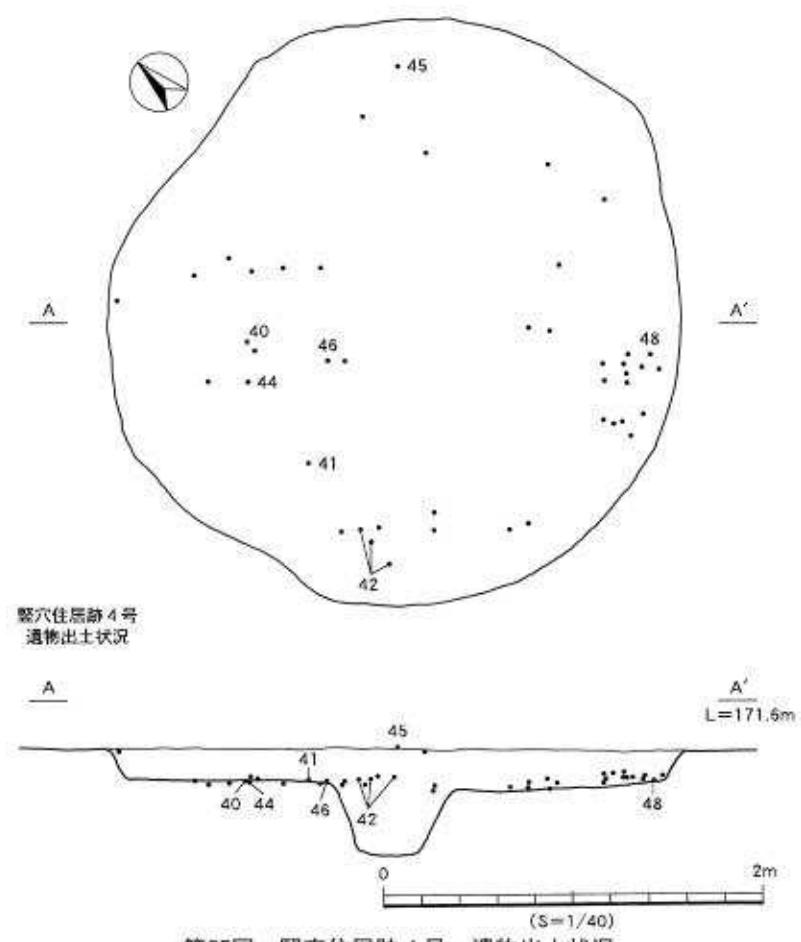
型の磨製石斧である。基部を欠損する。39は多孔質な安山岩の板状の素材を用い、素材の薄い1辺に表裏両面から粗い剥離を施して刃部を形成している。

堅穴住居跡4号（第27図）

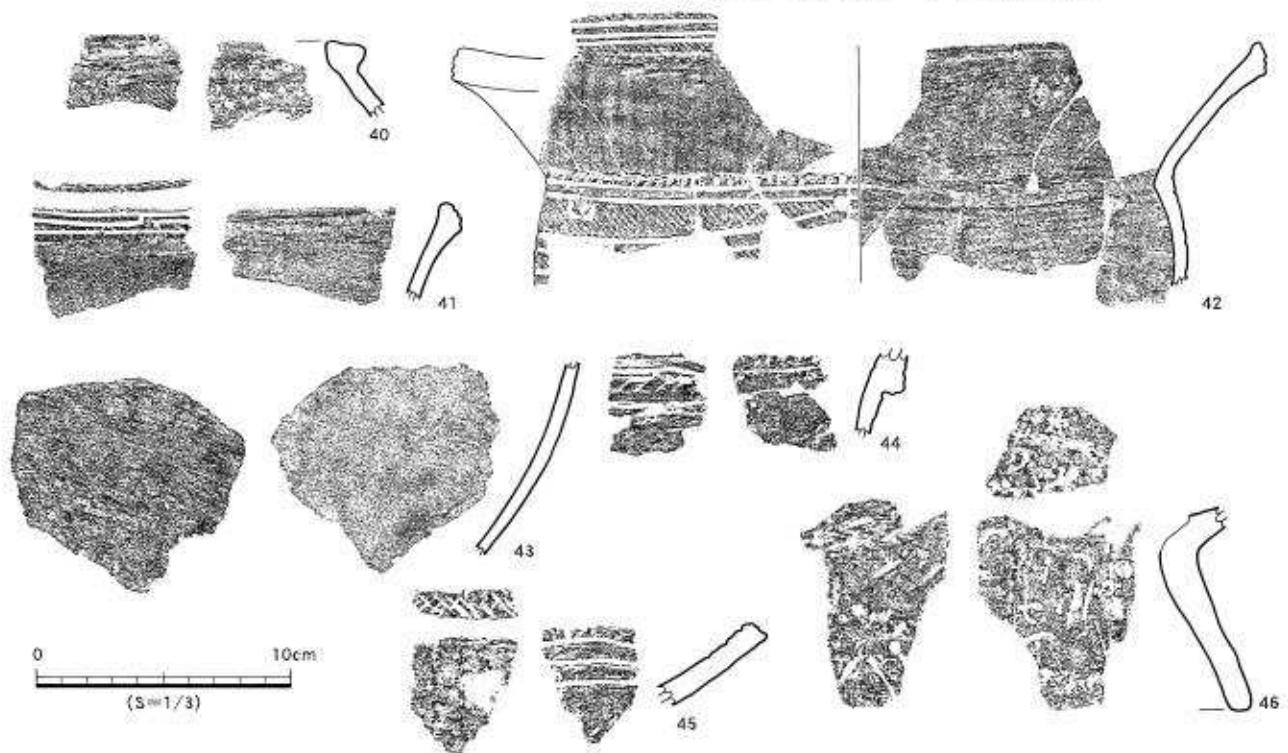
J-25区においてVI層上面で検出された。この周辺は、アカホヤ火山灰層が残存しており、検出時のプランは、長辺3.1m、短辺3.0mの略円形を呈していた。

調査は、中央を通る2本の直行するベルトを設定して掘り下げていった。硬化面等は見られず、埋土は単一でVI層が見られた時点で床面と判断した。埋土と床面等の記録を行った後に付帯施設等の確認を行った。その結果、4基の柱穴と床面中央に土坑が1基検出された。柱穴の

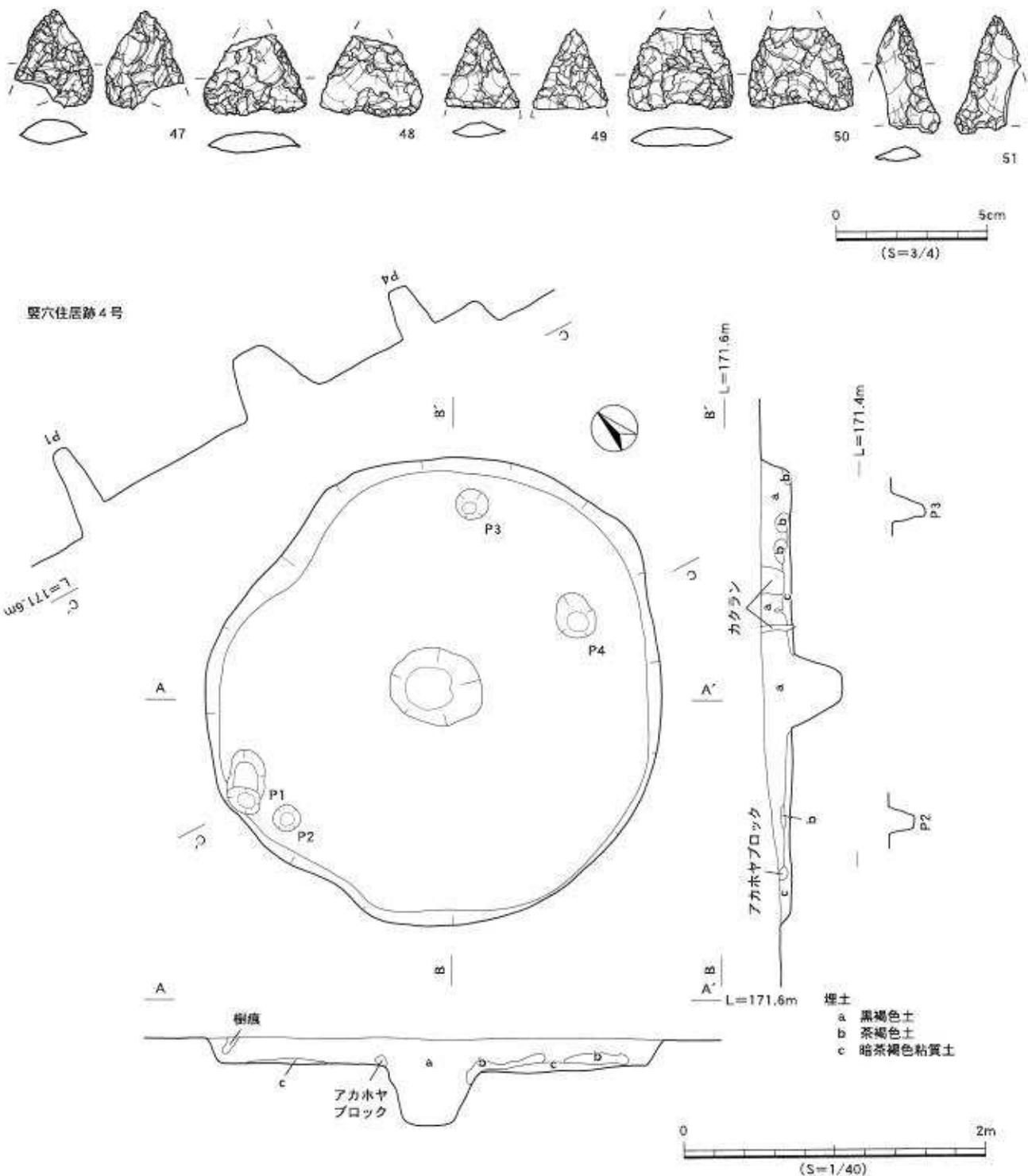
深さはP 2とP 3は20cm程度であるが、P 1とP 4は深い。中央に検出された土坑の埋土は、変化することなく単一で、焼土や炭化物等は含まれていない。なお、これらの記録を行った後に、再度床面を掘り下げて付帯施設等の検出に努めたが、これ以外には見られなかった。遺物は、埋土中から土器の小破片が多く出土した。完形品あるいは、埋設等の人為的な行為は確認できなかった。接合作業を経て、73点が出土し、この内12点を図化した。41・42は包含層分類ではX類に該当する。口縁部が断面三角形状に肥厚して波状口縁をなす。直線的な頸部から強く屈曲し、胴部は球状に膨らむ。文様は、縄文施文の後に沈線文等が施される。43は、41・42の胴部片と思われる。内外面共に入念なミガキが施され器壁は薄い。45は台付皿形土器の皿部片で、口唇部と口縁部内面とに施文が施される。46は台付皿形土器の脚部と思われる。47~51は石鏃である。48以外は埋土中一括して取り上げたが、比較的床面近くで出土している。周辺からは剥片類も出土しており、ややまとまっている感がある。



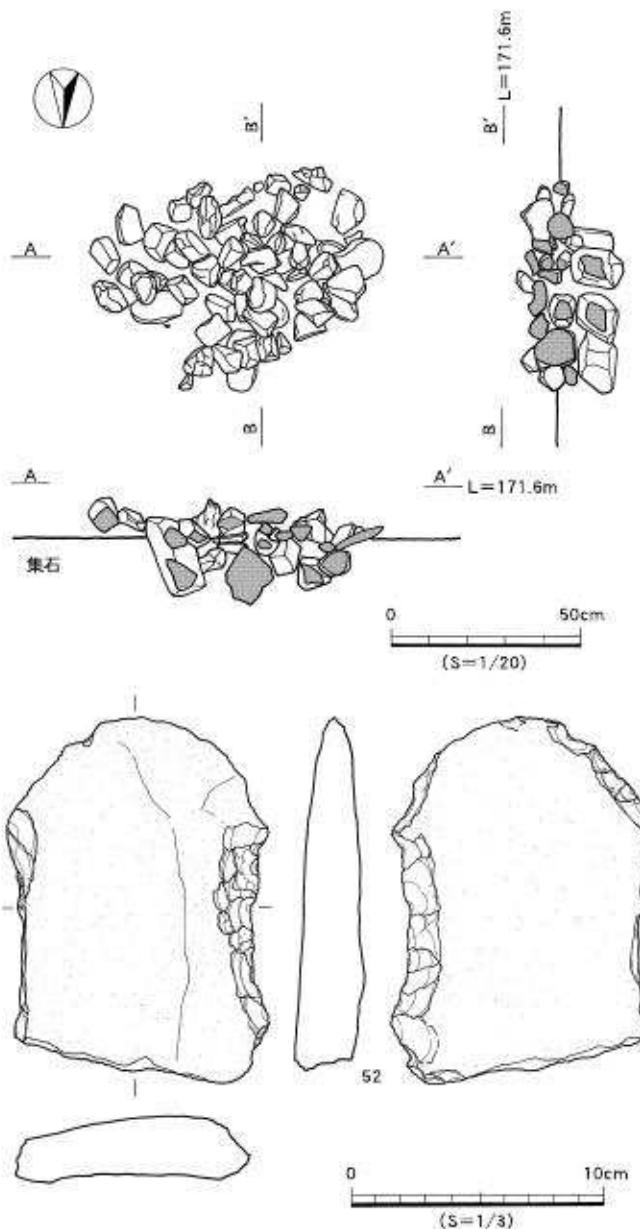
第25図 縫穴住居跡4号・遺物出土状況



第26図 縫穴住居跡4号・出土遺物



第27図 竪穴住居跡 4号・出土遺物



第28図 集石・集石内出土遺物

集石（第28図）

集石はM-22区、Ⅶ層上面で検出された1基のみであった。集石の規模は長軸80cm、短軸60cm程度で略楕円形に礫が集中する。礫堆積の厚さは25cm程度であるが、掘り込みの確認はできなかった。石材はほぼ安山岩で、5cm~20cm大の摩滅した礫を使用している。焼成を受け赤茶褐色に変色した礫も多く確認できる。礫の中には打製石斧基部片1点と石皿の破損品と思われるもの3点が含まれ、黒曜石チップ2点が出土した。

52は安山岩製の打製石斧先端を欠損した基部片である。右側縁からの剥離は表裏ともに入念に行われている。左側縁の剥離は裏面のみわずかに認められる。

土坑

縄文に該当すると思われる土坑については、平面形態

を基に円形・略円形（3・6、11、17、20~23、26、28~33）、楕円形・略楕円形（8、12~16、18・19、24・25、27、34）、不定形（1・2、7、9）、略長方形（10）の4類に分類した。

なお土坑内出土遺物の詳細については、後述する。

土坑3号（第29図）

I-14区、Ⅶ層上面で検出された。平面形態は長軸122cm×短軸113cmの円形を呈している。暗褐色土の埋土で検出面からの深さ14cmである。遺物は8点を出土し、内1点を図化した。

土坑4号（第29図）

I-14区、Ⅶ層上面で検出された。平面形態は長軸109cm×短軸102cmの円形を呈している。埋土は暗褐色砂壤土を主体とすると思われるが、中央付近に樹痕と思われる黒褐色砂壤土の落ち込みが見られる。検出面からの深さ17cmである。遺物は出土しなかった。

土坑5号（第29図）

I-14区、Ⅶ層上面で検出された。平面形態は長軸83cm×短軸76cmの円形を呈している。埋土は暗褐色砂壤土で、検出面からの深さは8cmである。土坑4号に隣接する。遺物は出土しなかった。

土坑6号（第29図）

I-14区、Ⅶ層上面で検出された。平面形態は長軸121cm×短軸90cmの略円形を呈している。埋土は褐色砂壤土と黒褐色砂壤土を主体とし、検出面からの深さ30cmである。床面中央付近に鉄分の付着が認められた。遺物は80点を出土し、内7点を図化した。

土坑11号（第29図）

K-16区、Ⅶ層上面で検出された。平面形態は長軸100cm×短軸90cmの円形を呈する。土坑埋土は黒褐色土で、検出面からの深さ14cmである。遺物は出土しなかった。

土坑17号（第29図）

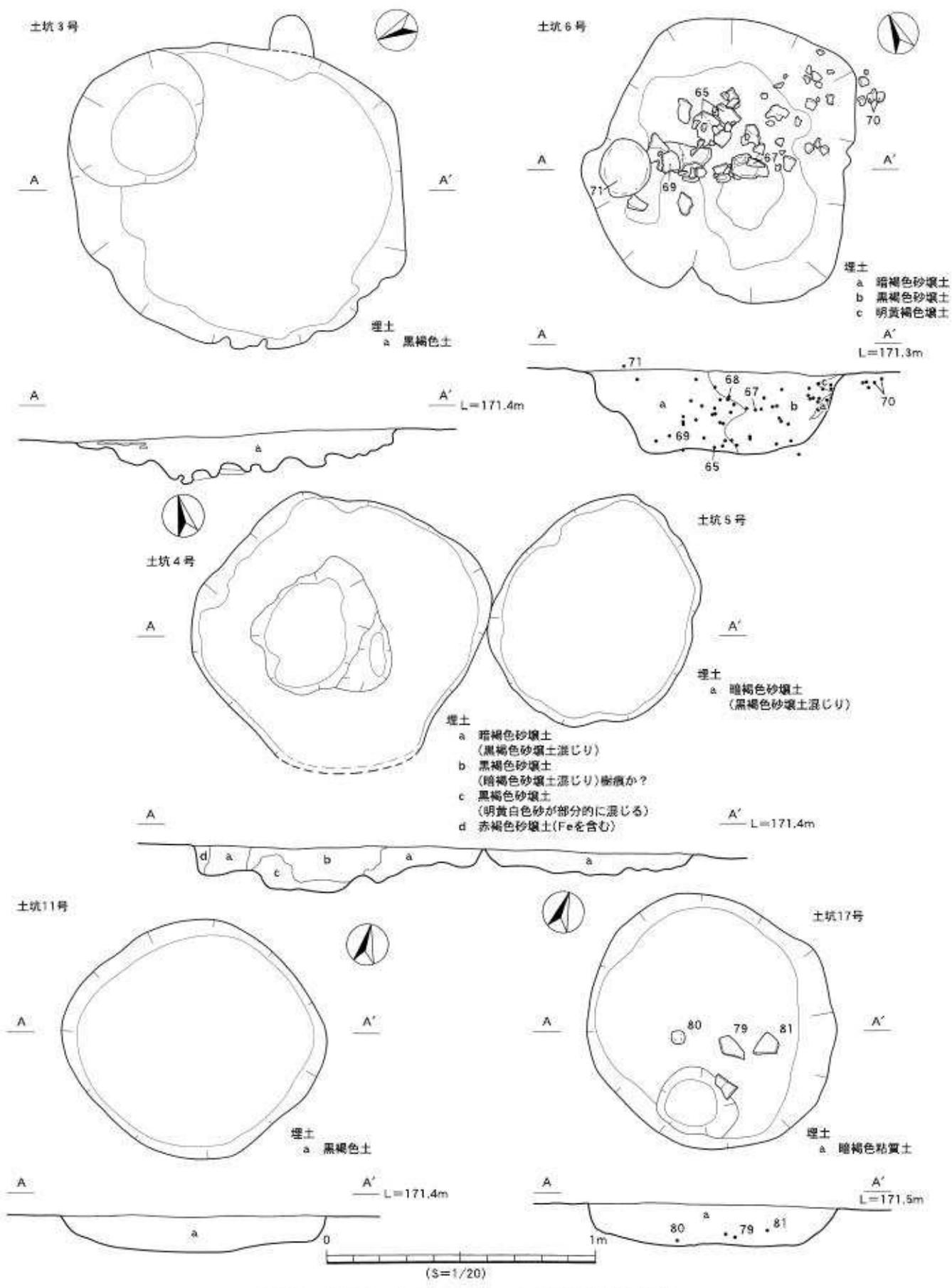
L-18区、Ⅶ層上面で検出された。平面形態は長軸95cm×短軸92cmの円形を呈する。埋土は暗褐色粘質土である。検出面からの深さ15cmで、床面はフラットである。また、南側壁面近くに径25~30cmほどの掘り込みが見られる。遺物は38点を出土し、内5点を図化した。

土坑20号（第30図）

K-18区、Ⅶ層上面で検出された。平面形態は長軸78cm×短軸75cmの円形を呈する。埋土は暗黒褐色土である。検出面からの深さ22~28cmである。遺物は13点を出土し、内3点を図化した。

土坑21号（第30図）

J-17区、Ⅶ層上面で検出された。平面形態は長軸79cm×短軸79cmの円形を呈する。埋土はアカホヤブロックと炭化物が少し混じる茶褐色土である。検出面からの



第29図 土坑 3～6, 11, 17号・6, 17号遺物出土状況

深さ10cmで床面はフラットである。遺物は60点を出土し、内6点を図化した。

土坑22号（第30図）

J-17区、Ⅶ層上面で検出された。平面形態は長軸102cm×短軸90cmの略円形を呈する。埋土は暗茶褐色土である。土坑形状はすり鉢状を呈しており、検出面からの深さ45cmである。また、斜面をなす土坑壁面の東側と西側に径20~30cm程度のピットが15~20cmの深さ掘り込まれている。遺物は27点出土し、内4点を図化した。

土坑23号（第30図）

J-17区、Ⅶ層上面で検出された。平面形態は長軸95cm×短軸81cmの円形を呈する。埋土は暗茶褐色土である。検出面からの深さ20cmで、床面はほぼフラットである。遺物は36点を出土したが、内6点を図化した。

土坑26号（第30図）

I-17区、Ⅶ層上面で検出された。平面形態は長軸93cm×短軸64cmの円形を呈する。埋土は茶褐色土を主体とする。中央部が細く深く落ち込み、ピット状を呈する。検出面からの深さ71cmである。遺物は23点を出土し、内3点を図化した。

土坑28号（第31図）

I/J-20区、Ⅶ層上面で検出された。平面形態は長軸90cm×短軸90cmの円形を呈する。埋土は黒褐色土である。検出面からの深さ10cmである。底面は皿状を呈するが、壁面の立ち上がりはしっかりしている。遺物は28点を出土し、内2点を図化した。

土坑29号（第31図）

I-19区、Ⅶ層上面で検出された。平面形態は長軸145cm×短軸121cmの略円形を呈する。埋土は黒褐色土である。検出面からの深さ12cmである。床面はほぼフラットで、壁面の立ち上がりは緩やかである。遺物は6点を出土し、内5点を図化した。

土坑30号（第31図）

I-18区、Ⅶ層上面で検出された。平面形態は、長軸116cm×短軸112cmの円形を呈する。埋土は黒褐色土である。検出面からの深さ10cmで、床面はほぼフラットである。遺物は49点を出土し、内1点を図化した。

土坑31号（第31図）

K-20区、Ⅶ層上面で検出された。平面形態は長軸131cm×短軸116cmの円形を呈する。埋土は暗黒色土である。検出面からの深さ11cmで、床面はほぼフラットである。土坑内から遺物が多量に出土し、遺物の出土状況から判断すると土坑の深さは21cm以上あったものと推定できる。遺物は92点を出土し、内7点を図化した。

土坑32号（第31図）

K-20区、Ⅶ層上面で検出された。平面形態は長軸117cm×短軸117cmの円形を呈する。埋土は、黄褐色土ブ

ロックが若干混ざる黒色土である。検出面からの深さ14cmである。土坑堀り込み南側きわは、後世のピットで切られている。遺物は37点を出土し、内4点を図化した。

土坑33号（第32図）

L-19区、Ⅶ層上面で検出された。平面形態は長軸125cm×短軸125cmの円形を呈する。埋土は黄褐色土ブロックが混ざる黒色土である。検出面からの深さは、31cmである。遺物は95点出土し、内13点を図化した。

土坑8号（第32図）

I-15区、Ⅶ層上面で検出された。平面形態は長軸103cm×短軸60cmの楕円形を呈している。埋土は黒色砂壤土で、検出面からの深さ6cmである。遺物は出土しなかった。

土坑12号（第32図）

K-16区、Ⅶ層上面で検出された。平面形態は長軸106cm×短軸80cmの楕円形を呈する。埋土は、アカホヤブロックを含む黒褐色砂質土から暗褐色土を主体とする。検出面からの深さ23cmで壁面の立ち上がりはしっかりしている。遺物は出土しなかった。

土坑13号（第32図）

L-17区、Ⅶ層上面で検出された。平面形態は長軸103cm×短軸60cmの楕円形を呈する。埋土は暗褐色粘質土で、検出面からの深さ16cmである。遺物は出土しなかった。

土坑14号（第32図）

L-17区、Ⅶ層上面で検出された。平面形態は長軸116cm×短軸90cmの楕円形を呈する。埋土はアカホヤブロックが少し混じる暗褐色粘質土で、検出面からの深さ18cmである。床面はフラットで、壁面の立ち上がりもはっきりしている。遺物は6点を出土し、内2点を図化した。

土坑15号（第32図）

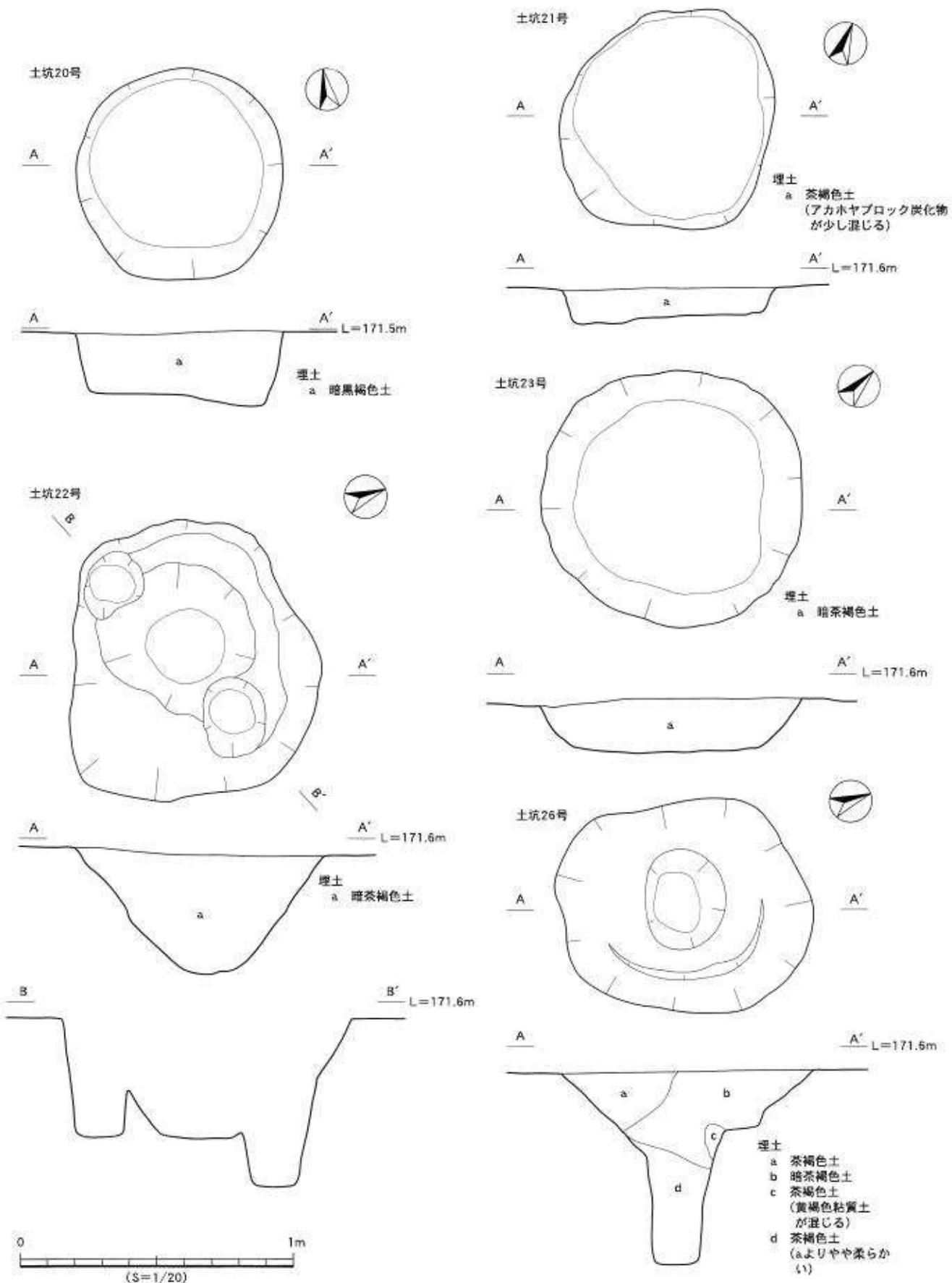
L-17区、Ⅶ層上面で検出された。平面形態は長軸115cm×短軸71cmの楕円形を呈する。埋土は黒褐色土である。検出面からの深さ13~20cmである。土坑底面に、深さ18~25cmのピット状の掘り込みが2ヵ所見られる。遺物では石皿片が出土した。

土坑16号（第33図）

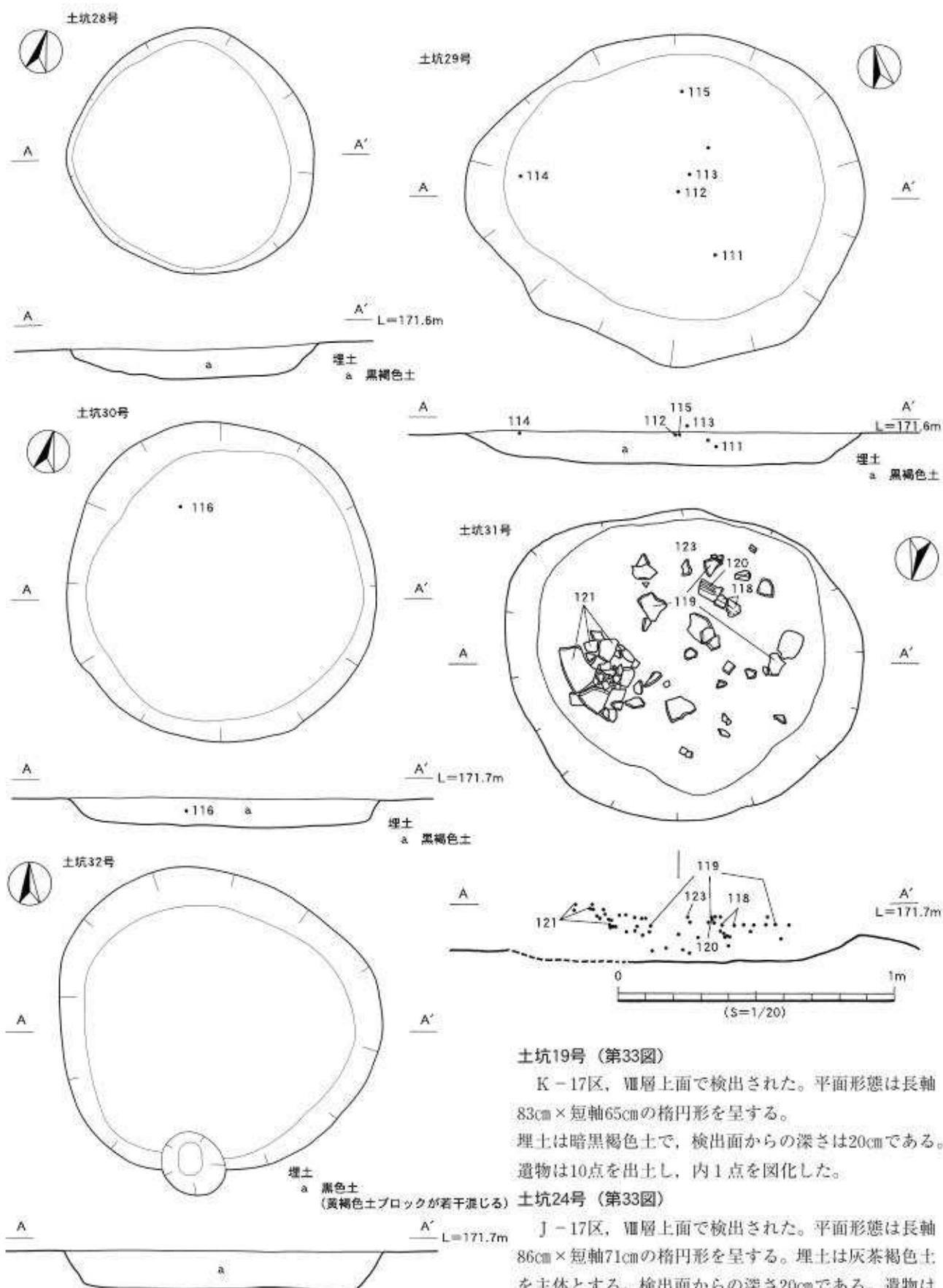
L-17区、Ⅶ層上面で検出された。平面形態は長軸138cm×短軸95cmの楕円形を呈する。埋土は黒褐色土である。検出面からの深さ15cmである。遺物は出土しなかった。

土坑18号（第33図）

L-17区、Ⅶ層上面で検出された。平面形態は長軸77cm×短軸57cmの略楕円形を呈する。埋土は暗黒褐色土である。検出面からの深さ19cmである。遺物は80点を出土した。内、石皿1点を図化した。



第30図 土坑20~23, 26号



土坑19号 (第33図)

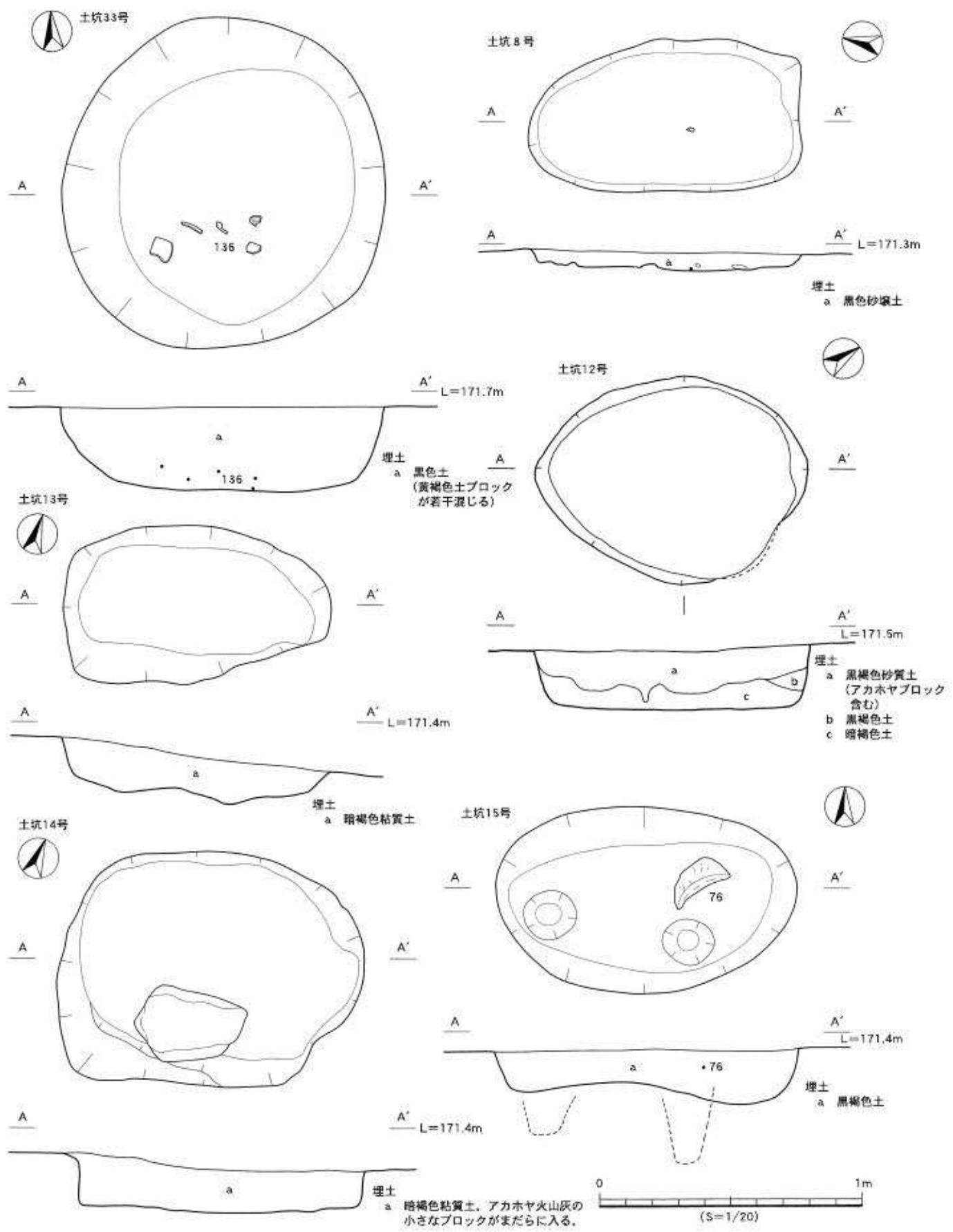
K-17区、埴層上面で検出された。平面形態は長軸83cm×短軸65cmの楕円形を呈する。

埋土は暗黒褐色土で、検出面からの深さは20cmである。遺物は10点を出土し、内1点を図化した。

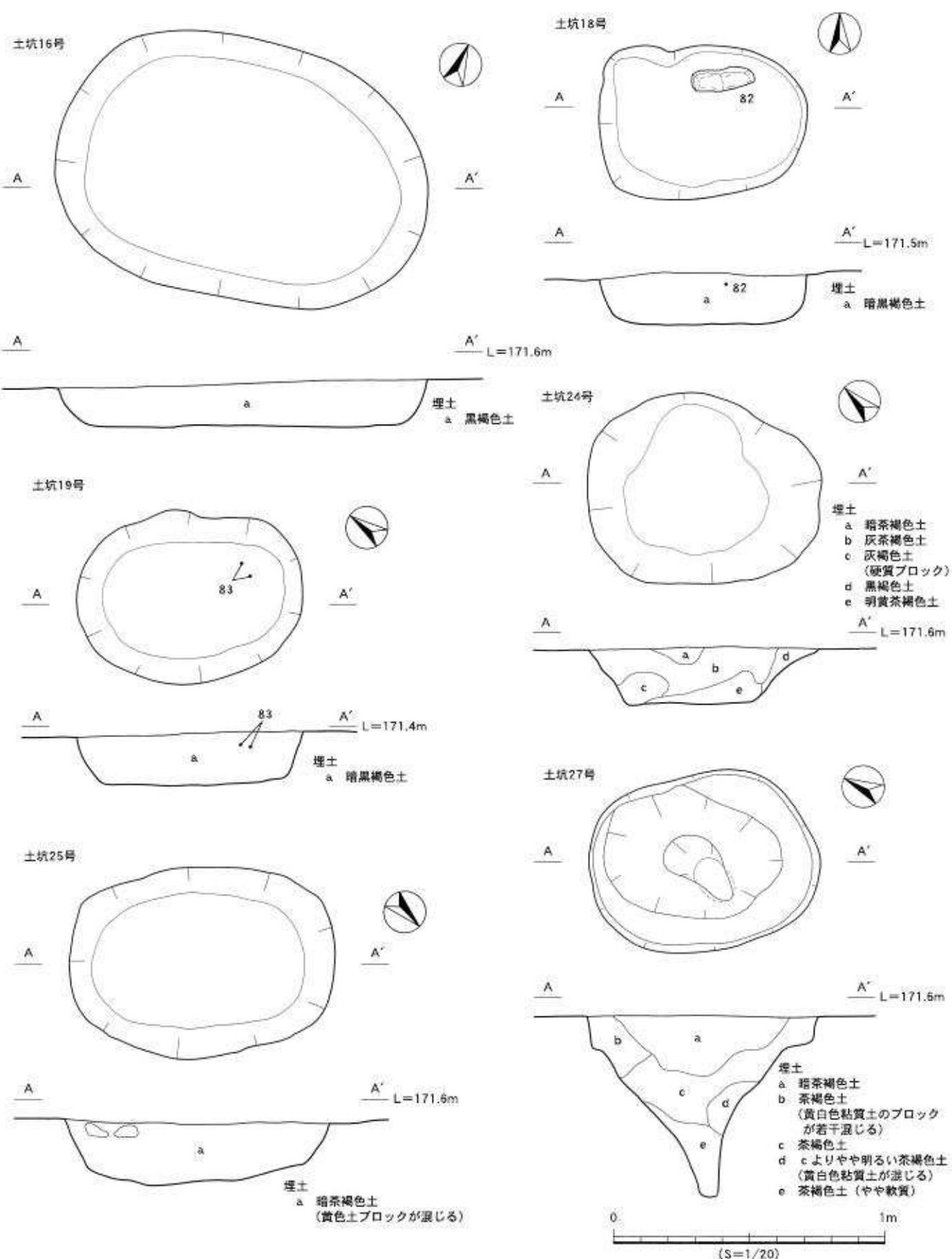
土坑24号 (第33図)

J-17区、埴層上面で検出された。平面形態は長軸86cm×短軸71cmの楕円形を呈する。埋土は灰茶褐色土を主体とする。検出面からの深さ20cmである。遺物は出土しなかった。

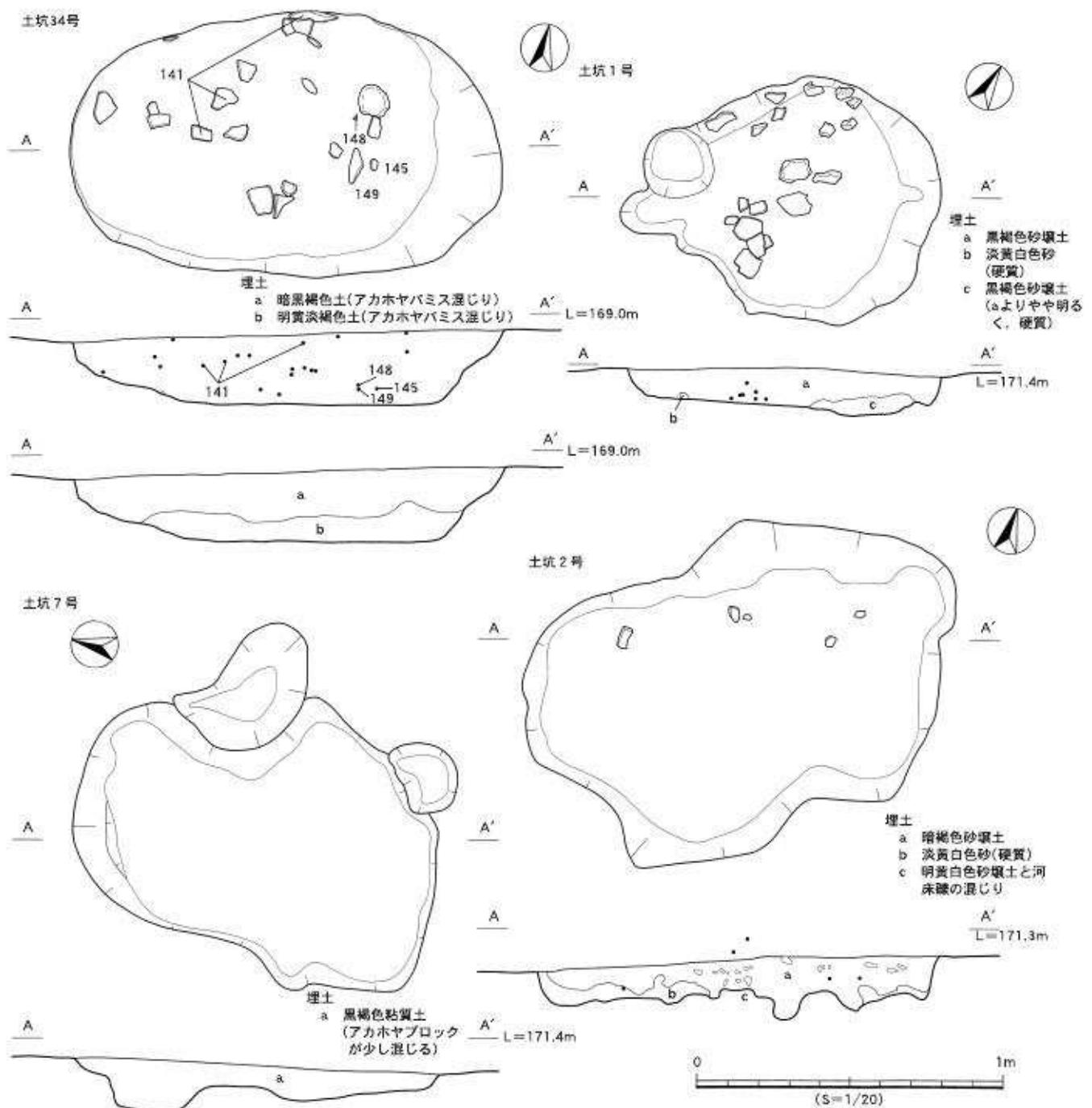
第31図 土坑28~32号, 29~31号遺物出土状況



第32図 土坑8, 12~15・15, 33号遺物出土状況



第33図 土坑16, 18, 19, 24, 25, 27号・18, 19号遺物出土状況



第34図 土坑1, 2, 7, 34号・1, 2, 34号遺物出土状況

土坑25号（第33図）

J-17区, VII層上面で検出された。平面形態は長軸98cm×短軸70cmの楕円形を呈する。埋土は黄色土ブロックが混ざる暗茶褐色土である。検出面からの深さ20cmである。遺物は出土しなかった。

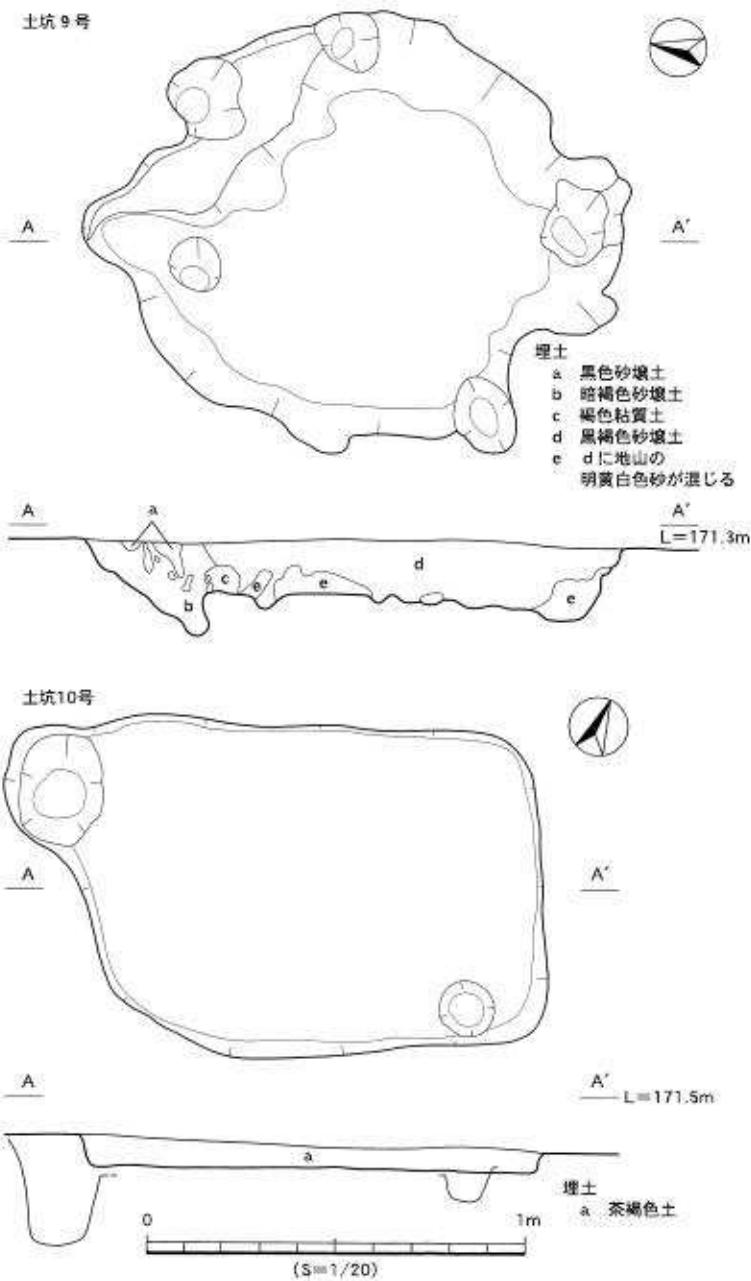
土坑27号（第33図）

I-17/18区, VII層上面で検出された。平面形態は長軸86cm×短軸66cmの楕円形を呈する。埋土は茶褐色土を主体とする。中央部が細く深く落ち込みピット状を呈する。

検出面からの深さ67cmである。遺物は26点を出土し、内3点を図化した。

土坑34号（第34図）

E-55区, VI層上面で検出された。平面形態は長軸141cm×短軸87cmの楕円形を呈する。埋土はアカホヤバニスが混じる暗黒褐色土が主体である。埋土は検出面から15cm程で分層でき、境界面付近に炭化物が多く見られた。検出面からの深さ24cmである。遺物は48点を出土し、内9点を図化した。



第35図 土坑9号、10号

土坑1号（第34図）

K-11区でⅦ層上面で検出された。平面形態は長軸105cm×短軸80cmの略円形から不定形を呈している。黒褐色砂壤土を主体とする埋土で検出面からの深さ14cmである。遺物は96点を出土し、内11点を図化した。

土坑2号（第34図）

J-13区、Ⅶ層上面で検出された。平面形態は長軸138cm×短軸90cmの略楕円から不定形を呈している。暗褐色砂壤土を主体とする埋土で検出面からの深さ10cmである。遺物は5点出土したが、図化には至らなかった。

土坑7号（第34図）

I-14区、Ⅶ層上面で検出され、平面形態は長軸120cm×短軸70cmの略楕円形を呈している。北側長軸の立ち上

がり部分は、樹痕のため破壊されている。埋土はアカホヤブロックが少し混じる黒褐色粘質土で、検出面からの深さは10cmである。遺物は出土しなかった。

土坑9号（第35図）

I-15区、Ⅶ層上面で検出され、平面形態は長軸143cm×短軸111cmの略円形から不定形を呈している。また、土坑内には径15cm程深さ10～15cmほどの落ち込みが5カ所確認された。土坑埋土は黒褐色砂壤土を主体とし、検出面からの深さ17cmである。遺物は出土しなかった。

土坑10号（第35図）

J-16区、Ⅶ層上面で検出され、平面形態は長軸125cm×短軸88cmの略長方形を呈する。土坑床面には深さ8～20cmのピット状の掘り込みが2カ所確認された。土坑埋土は茶褐色土で、検出面からの深さ5cmで壁面の立ち上がりはしっかりしている。遺物は出土しなかった。

土坑内出土遺物

1号土坑内出土遺物（第36図53～63）

53は口縁部がわずかに肥厚し、波状を呈する土器の波頂部である。4～5条の横走する細沈線が施され、波頂部の口唇部に棒状工具で刺突を行い、そこから縦方向の沈線を施す。56～58は同類の土器と考えられる。56は口縁部に三条の沈線を巡らせその間に縄文を施し、口縁端部内面を指頭でなで凹ませる。57・58は胴部片で沈線が横走し、57は頸部屈曲部に刺突を施す。62は透かし穴をもつ台付皿の脚部である。63は鋸歯状二等辺三角形で抉りの深い石鎌で、淀姫産の石材を利用している。

3号土坑内出土遺物（第36図64）

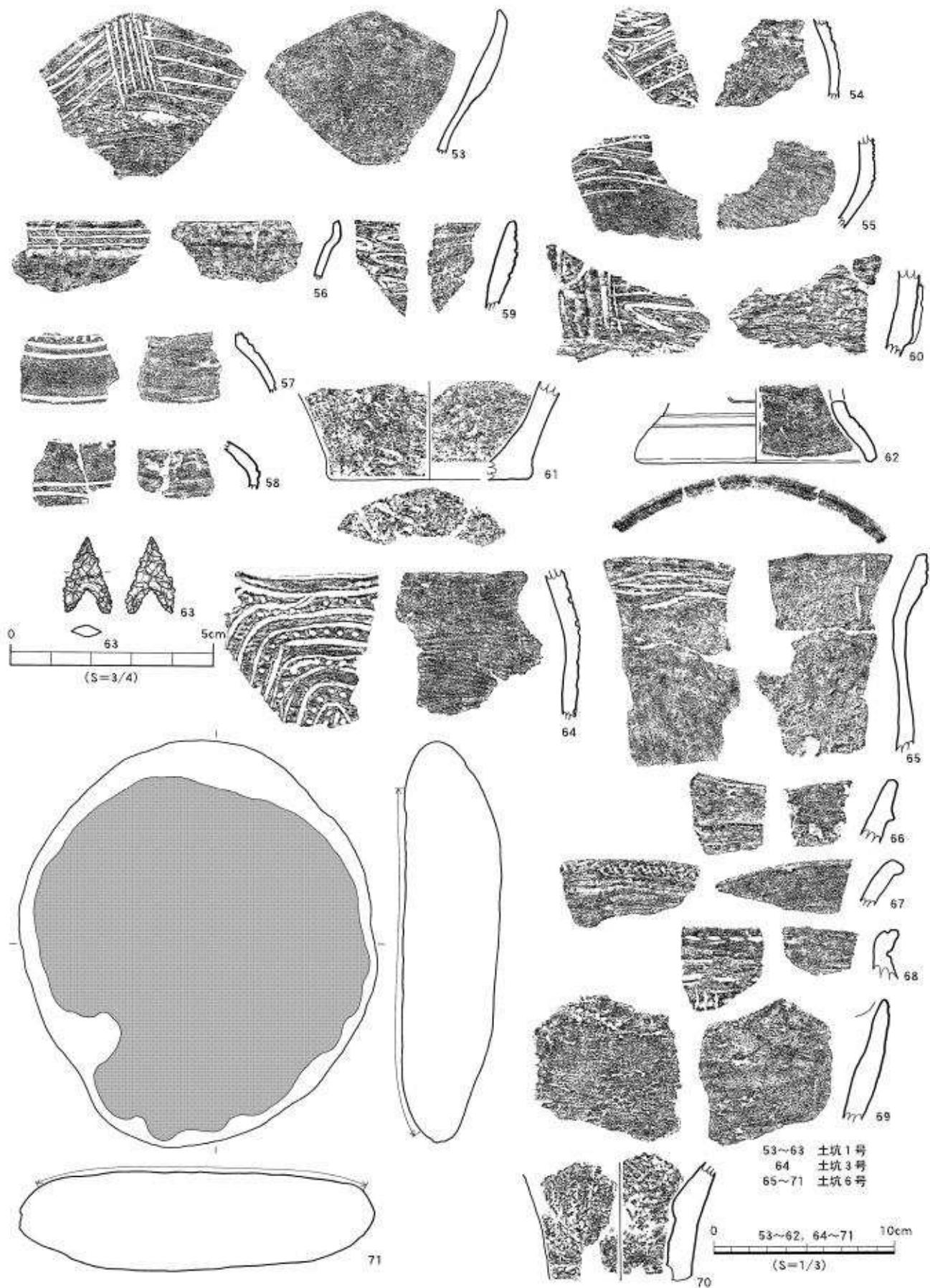
64は2条の沈線を基本に、その間に竹管状の工具で連点を施す。

6号土坑内出土遺物（第36図65～71）

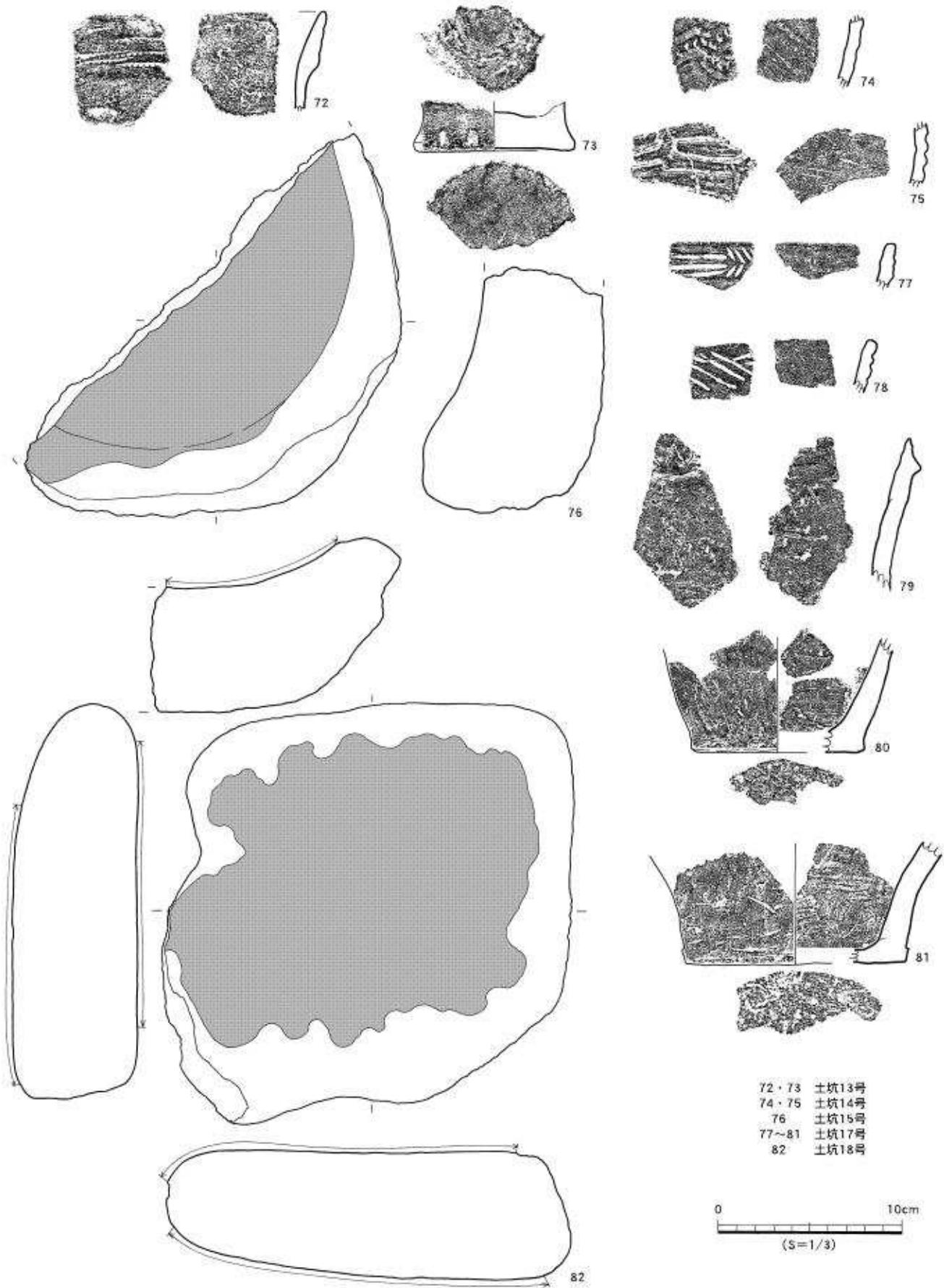
65～67は同類の土器と考えられる。65の口縁部は蛇頭状を呈し、口縁部外面に横位の沈線を施す。66は口縁下部に三角突帯が廻る。67は口唇部に縄文を施し、外面には横位のミガキが見られる。68は口唇部に横方向から刺突した短沈線が施され、口縁屈曲部にも同様のものがみられる。69は波状口縁を呈する無文の口縁部である。

13号土坑内出土遺物（第37図72・73）

72は口縁部断面形状が三角形を呈し、口縁部外面に横位の貝殻刺突を施す。73は底部片で指頭による押圧で端部外面を波状にする。



第36図 土坑1, 3, 6号出土遺物



第37図 土坑13～15、17、18号出土遺物

14号土坑内出土遺物（第37図74・75）

74・75ともに胴部片で、74は凹線間に二叉状工具で連続刺突を施す。75は棒状工具で沈線を施す。

15号土坑内出土遺物（第37図76）

76は安山岩製の石皿片で、使用により中央部が大きく凹む。

17号土坑内出土遺物（第37図77～81）

77は口縁部がやや肥厚し、外面に横位の沈線と羽状の沈線が施される。78は外面に斜位の短沈線を連続して施す。79は口縁部が断面三角形を呈し、口縁上部に鋸歯状の沈線を施す。80・81は平底を呈する底部片で後期に該当すると思われる。

18号土坑内出土遺物（第37図82）

82は砂岩製の石皿で表裏両面に使用痕が認められる。

19号土坑内出土遺物（第38図83）

83は屈曲した短い頸部をもち、口縁部外面、頸部下位に縄文を施し、頸部下位の縄文の下には沈線が施される。口縁部から曲線的に伸びる橋状把手は二股に分かれ胴部へつながる。

20号土坑内出土遺物（第38図84～86）

84は台付皿の皿部である。内面に数条の沈線が廻り、口唇部にも1条の沈線が廻る。85は口縁部に横位の2条の沈線が施される。

21号土坑内出土遺物（第38図87～92）

87は口縁部外面にやや太めの斜位の沈線を施す。88は沈線間に縦位の貝殻腹縁刺突を連続して施す胴部片である。89は飾り突起部で突起上端を凹ませる。90は口縁部がやや肥厚する無文の口縁部片である。91・92は、底径とともに6.6cmの底部片で同一個体の可能性がある。

22号土坑内出土遺物（第38図93～96）

93は口縁部がL字状に折れ、口唇部を平坦にし、口縁外面に斜位の連続刻みを施す。94は口唇部に斜位の連続刻みを施し、内面下部を削りで仕上げる。95は口縁部が緩やかに内弯し、キャリバー状を呈し波状を呈する。96は器壁が薄く、外面を横位のミガキで仕上げる。

23号土坑内出土遺物（第38図97～102）

97は断面三角形の口縁部で、口唇部に棒状工具による連続刺突を2条施す。98・99は口唇部に斜位の連続刺突、外面に横位の沈線を施す。100は口縁部が外反し、屈曲部外面に断面三角形の突帯を廻らす。口唇部と突帯上に斜位の刻み目を施す。101は沈線間に縄文を施す台付皿の脚部である。102は胴部屈曲から上位に横位及び斜位の沈線を施し、一部に縄文を施す。

26号土坑内出土遺物（第39図103～105）

103は口唇部が平坦で、外面にやや太めの深い沈線を施す。104は平底の底部片で、内外面ともに丁寧ななで調整である。105は円盤形土製加工品である。

27号土坑内出土遺物（第39図106～108）

106は飾り上面に刻みを施し、口縁外面には横走沈線の痕跡も見える。107・108は台付皿で108は一部の沈線間に縄文が施され、内側には斜位の刻みも施される。

28号土坑内出土遺物（第39図109・110）

109は口縁外面にやや太めの斜位の沈線を施す。

29号土坑内出土遺物（第39図111～115）

111は口唇部を平坦に仕上げた上で、粘土紐を波形に貼り付ける。口縁外面に凹線を施す。112は口縁部に斜位の細沈線を施す。113は断面三角形の口縁の一部で、斜位の貝殻刺突と横走する沈線が確認できる。114は断面三角形を呈する口縁部、外面に斜位の貝殻腹縁刺突を施す。115は横位の沈線間に縄文を施す胴部片である。

30号土坑内出土遺物（第39図116）

116は口唇部を波状にし、突起部をもつ。

31号土坑内出土遺物（第39図117～123）

117は平坦な口唇で、口縁部には斜位の沈線を施す。118・119は断面三角形を呈する口縁で、横位の沈線が2条廻り、沈線下に斜位の貝殻刺突を施す。120は突起部をもち、縦位横位の沈線を施す。121は沈線間に縄文を施し、さらに朱が塗られる。122は外面を丁寧にミガキで仕上げる鉢である。

32号土坑内出土遺物（第39図124～127）

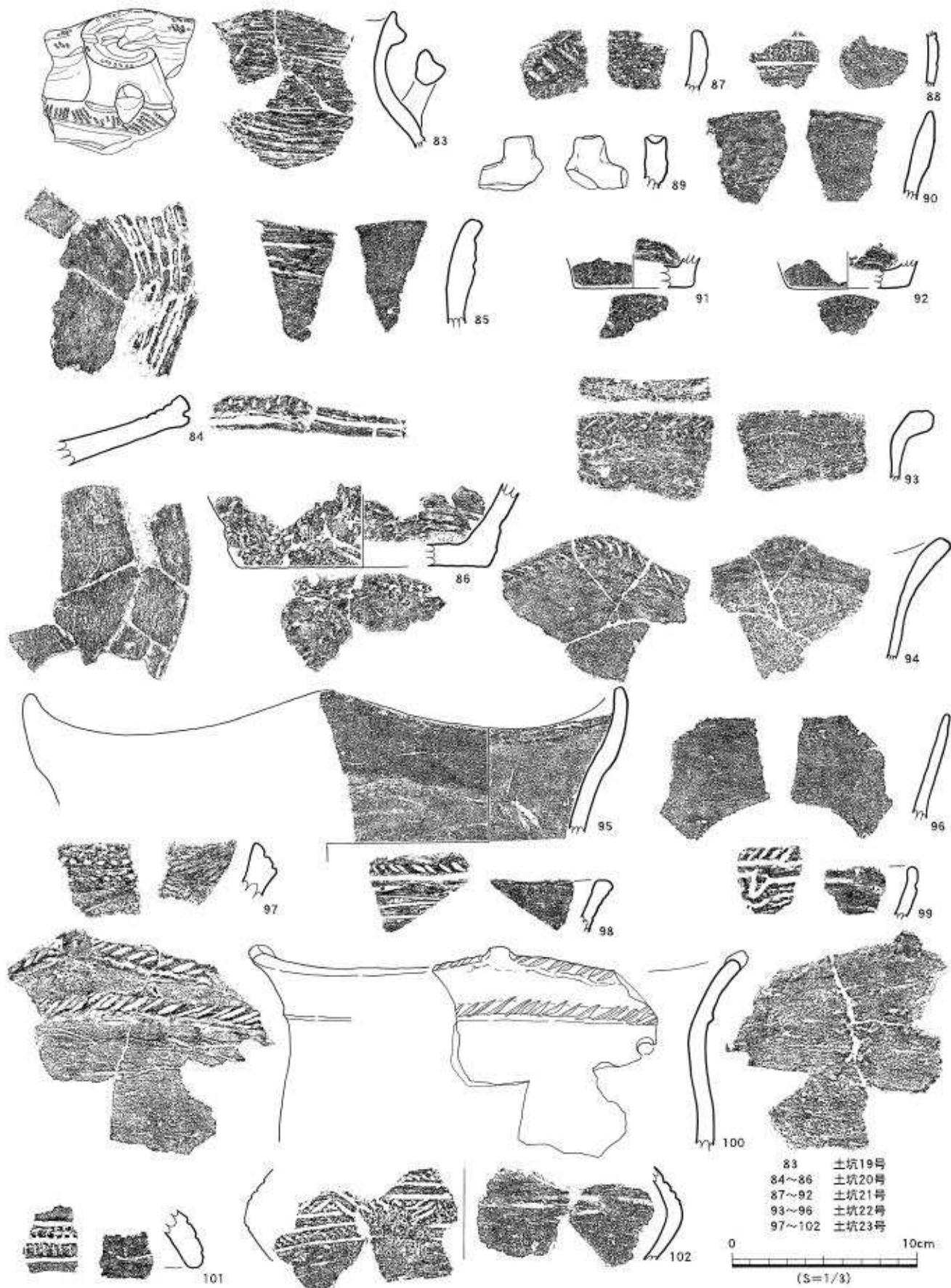
124・125ともに口唇部を波状にし、124は口唇部にねじり紐状の突起が付き、125は外面に太めの沈線が廻る。126は断面三角形を呈する口縁部で、ヘラ状工具での横からの刺突による縦位の短沈線が施される。

33号土坑内出土遺物（第40図128～140）

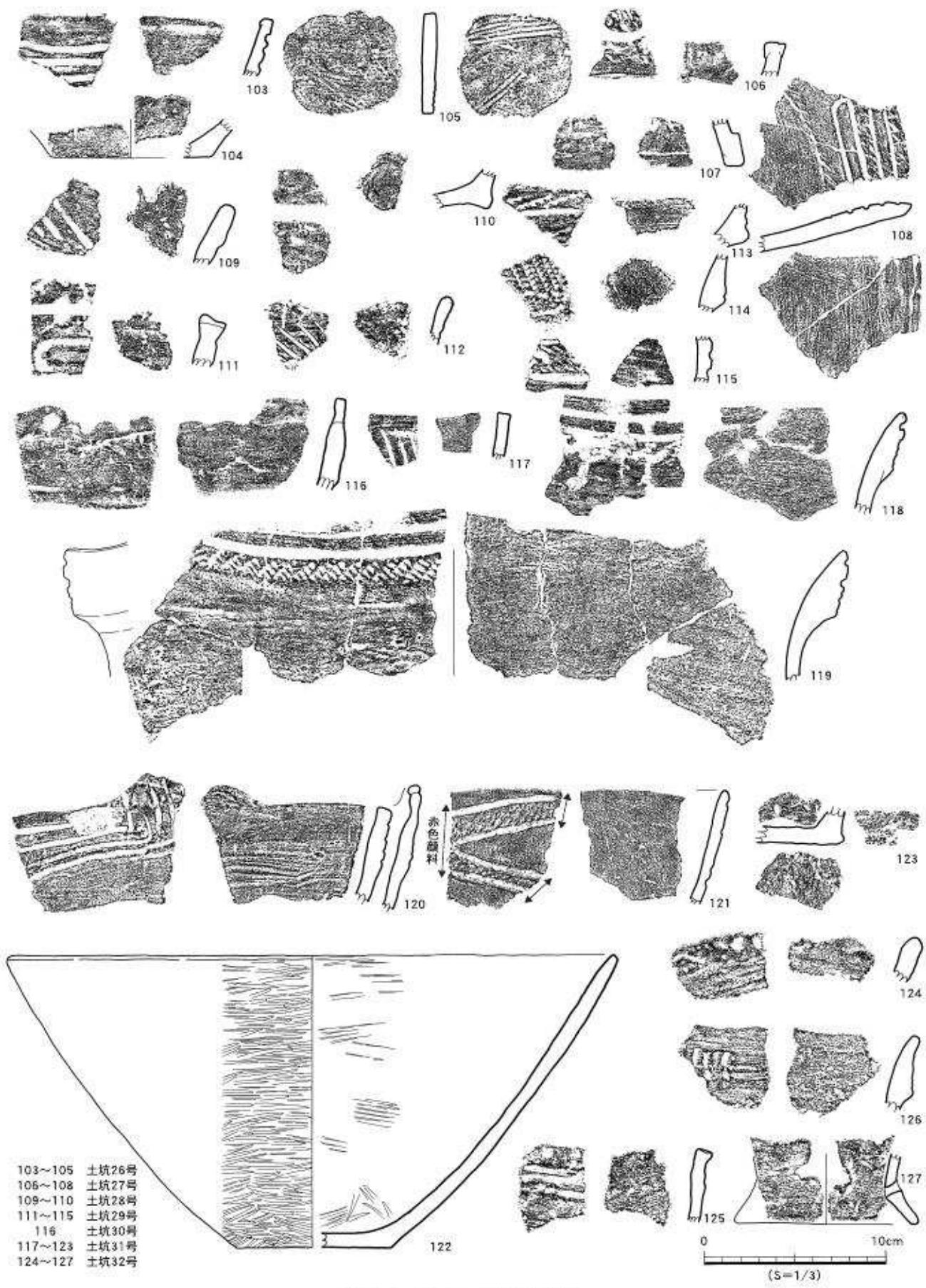
128～130は口唇部を波状にする。128は外面に指頭による連点を施す。129は指頭により左右対称の曲線を施す。130は外面に逆S字状の凹線を施す。133は口唇部外面に斜位の刻みを施し、下位に横位の沈線を施す。134・135は断面三角形で、横走する2条の沈線間に横位の貝殻刺突を施す。135は沈線の端部に凹点を施し、斜位の貝殻刺突もみられる。138～140は円盤形土製加工品である。

34号土坑内出土遺物（第40図141～149）

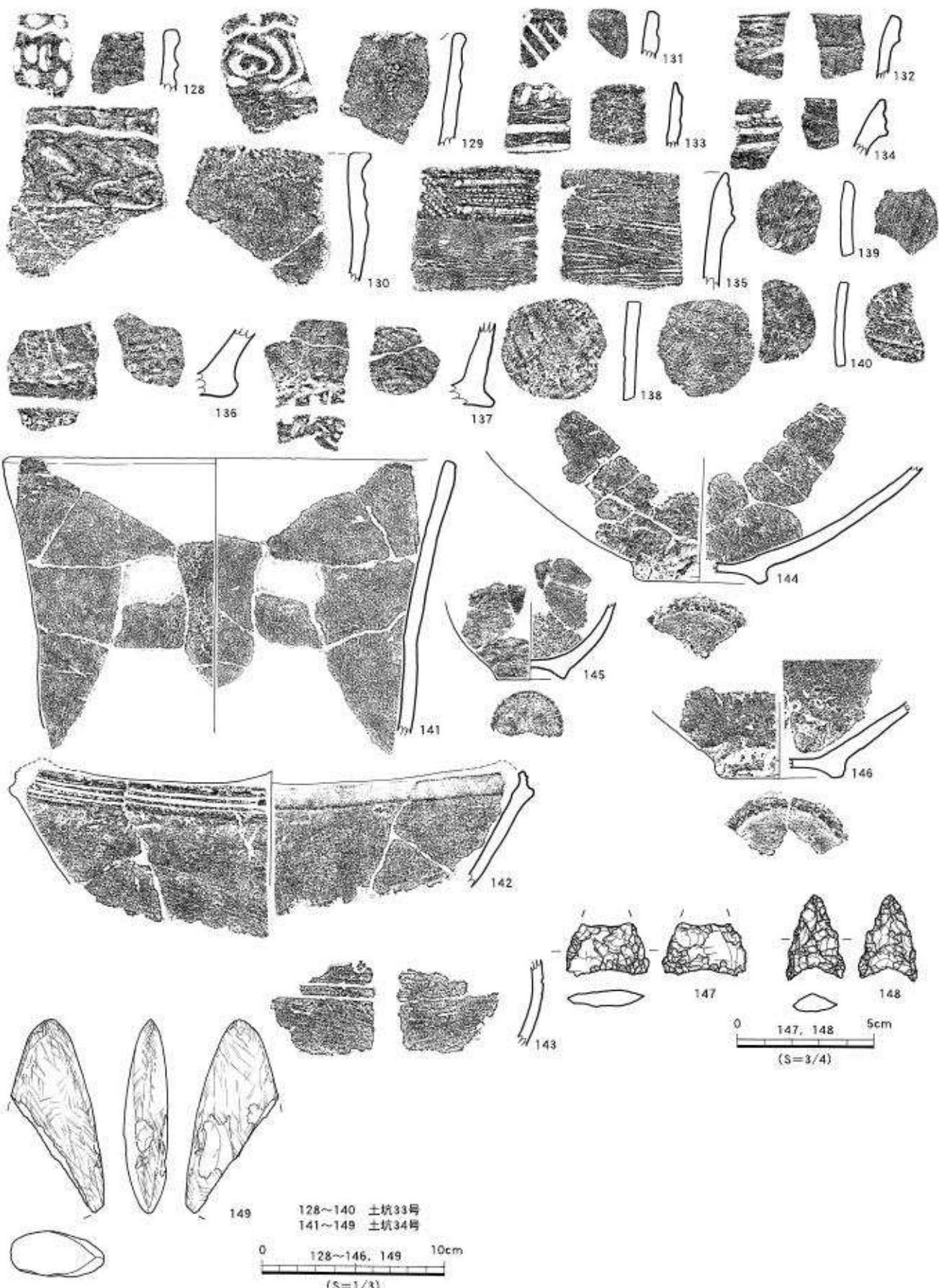
141は無文の深鉢で丁寧ななで仕上げである。142～146は同類の土器である。142は口縁部に三条の沈線を廻らせ、その間に縄文を施す。口縁端部内面を指頭でなで凹ませる。143は横走する沈線間に縄文を施し、縄文は沈線下位にあふれている。144～146は底径が小さく、若干上げ底になる。147・148は二等辺三角形で基部の抉りが浅い石鑿で、147・148ともに日東産の黒曜石を利用している。149は蛇紋岩製の磨製石斧の基部である。



第38図 土坑19~23号出土遺物



第39図 土坑26~32号出土遺物



第40図 土坑33, 34号出土遺物

(3)遺物 土器

下鶴遺跡は、縄文時代中期後半から後期の土器を中心とし、早期、晩期の遺物が出土している。土器は調査対象区のはば全域で出土しているが、16~23区にひとつの集中が見られる。後世の攪乱、削平等により遺物は小破片化しており、分類作業は労力を要した。さらに時間的制約もあり、接合作業に時間を割くことがほとんど出来なかつたため、器形を確認できる資料が少なくなったことは課題である。

出土遺物の分類概要を行った後、それぞれの詳細について記述する。

I類土器（第43図150~162）

出土点数が少なかったため、早期の土器は一括した。

II類土器（第43図163~176）

二列単位の施文具による押引文や刺突文に加えて、凹線文が施されるもので、胎土中に滑石片を混入し、器面にぬめり感のあるものが多い、並木式土器と呼ばれる土器の一群である。

III類土器（第43~47図177~290）

太めの凹線文で曲線的な文様が施されるものや、直線的な文様が施されるもの、凹点が施されるものがみられる。また口縁部がやや肥厚し、文様が凹線文からするとやや細めの範描きの縦位の短線や斜線、S字状文、逆S字状文を組合せた文様モチーフをもつもの、さらに細い沈線で斜線文や縦位の短線を施すもの。阿高式土器に帰属するもので、南福寺式土器及び後出する出水式土器を含め、そこからつながる土器の一群、阿高系の土器を一括した。

IV類土器（第47~52図291~403）

口縁部を断面三角形や、くの字状に肥厚させ、そこに斜位の連続刺突文や爪形の連続刺突文、貝殻刺突文を施すもの、沈線により横線文、凹線文を施すもの、さらに入れを組合せたものがみられ、口縁部は平口縁、4カ所の波頂部をもつた波状口縁がみられる。市来式土器と呼ばれる土器の一群である。

V類土器（第52・53図404~446）

口縁部の断面形態がやや断面三角形状を示すものや、くの字状に折れ曲がるもの、口縁形態が平縁、波状をなすものがみられる。文様は、口縁部下に連続した斜位の貝殻刺突文がみられる。丸尾式土器と考えられる一群である。

VI類土器（第54図447~453）

口縁部がやや内弯し、口縁部や胴部に沈線を施し、沈線間に貝殻腹縁波頂部で文様を施す。南九州で納曾式土器と呼ばれる一群である。

VII類土器（第54~59図454~580）

磨消縄文系の土器群でやや太めの沈線で口縁部に沈線文、渦巻文が施され、沈線間に磨消縄文が施される。また沈線のみのものもみられる。器形は口縁部が屈曲しないもの、口縁部で屈曲し外反気味にすっと立ち上がるものの、L字に屈曲し口唇部が平坦になり、波頂部もしくは橋状把手を中心に口唇部上面に刺突文や沈線を施すものがみられる一群である。小池原上層式土器から鐘崎式土器と考えられる土器の一群である。

VIII類土器（第60~67図581~754）

深鉢土器では口縁部をやや肥厚させ、そこにヘラ状工具等で斜位の羽状の刺突を施す。口唇部に逆W字状、M字状の貼り付け文を施す。口縁部断面形が緩い三角形状

（蛇頭状）を呈し外面に沈線が施されるもの口縁部のやや下位に断面三角形状の突帯を廻らし、その突帯上に連続刺突、刻目を施す。鉢形土器はV類土器と比較して口唇部から口縁部にかけてやや間延びした器形を呈するもの、口縁部が長く伸び胴部へとつながるもののがみられ、胴部が張る。口唇部に縄文が施され、胴部には沈線により曲線文、直線文が描かれ、沈線文間には縄文が施され

る。従来、北久根山式土器と呼ばれる土器の一群である。
IX類土器（第67・68図755~781）

口縁部はやや内弯し、胴部の立ちあがりが緩やかなカーブを描くものや、ほぼ直線的に立ち上がるものがみられる鉢形の土器で、口縁部、胴部外面に沈線文及び縄文が施文される。辛川式土器と呼ばれる土器の一群である。

X類土器（第68~69図782~807）

口縁部、胴部の屈曲がIX類土器と比較して、シャープになり、胴部屈曲部の内面には明瞭な稜線が確認できるようになる。また口縁端部内面を指頭でなで凹ませるものが多くみられる。文様は口縁部に2~3条の沈線と縄文、胴部には頸部との境に連点文を施しその下位には沈線文と縄文、文様のポイントとなるところに凹点や、対向弧文が施文される。従来西平式土器と呼ばれる土器の一群である。

XI類土器（第69図808~811）

口縁部は直口し横走する凹線が施される。ごくわずかではあるが出土している。三万田式土器と思われるものである。

XII類土器（第69~71図812~835）

晩期の土器を一括した。深鉢は粗製で口縁部が若干内弯しながら外開きに立ちあがり、外面に沈線が数条施されるもの、口縁部が若干肥厚し、無文で外面に条痕が残るものがみられる。浅鉢は精製で口縁部が頸部から口縁部にかけて大きく弧状に外反し、さらに口唇で立ち上がる。曲線的な胴部に、短く外反する口縁部がつき、口縁部内面に沈線が施され口縁部断面形が丸くなる、一部突起をもつものもみられる。その他、口縁部を若干肥厚させ、器面内外ともに条痕が残るものなどがみられる土器の一群である。従来の入佐式土器、黒川式土器に該当すると思われる。

XIII類土器（第71~75図836~946）

その他、分類できなかったものを一括してその他の土器として扱った。後・晩期の土器のものと思われる底部片、円盤形土製加工品も一緒に掲載している。

XIV類土器（第76~80図947~1046）

いわゆる台付皿を一括した。皿部が四角形を呈するもの、円形を呈するもの、飾り部ほかに沈線文を多用するもの、飾り部がW字状もしくは、それに類似した貼付文であるもの、皿部内面の文様に沈線と縄文を併用するものがみられる。脚部は透かし穴がみられるものが多い、文様は沈線文、連点文、貝殻刺突文、沈線と縄文の併用、無文のものがみられる。

以下、それぞれについて記す。

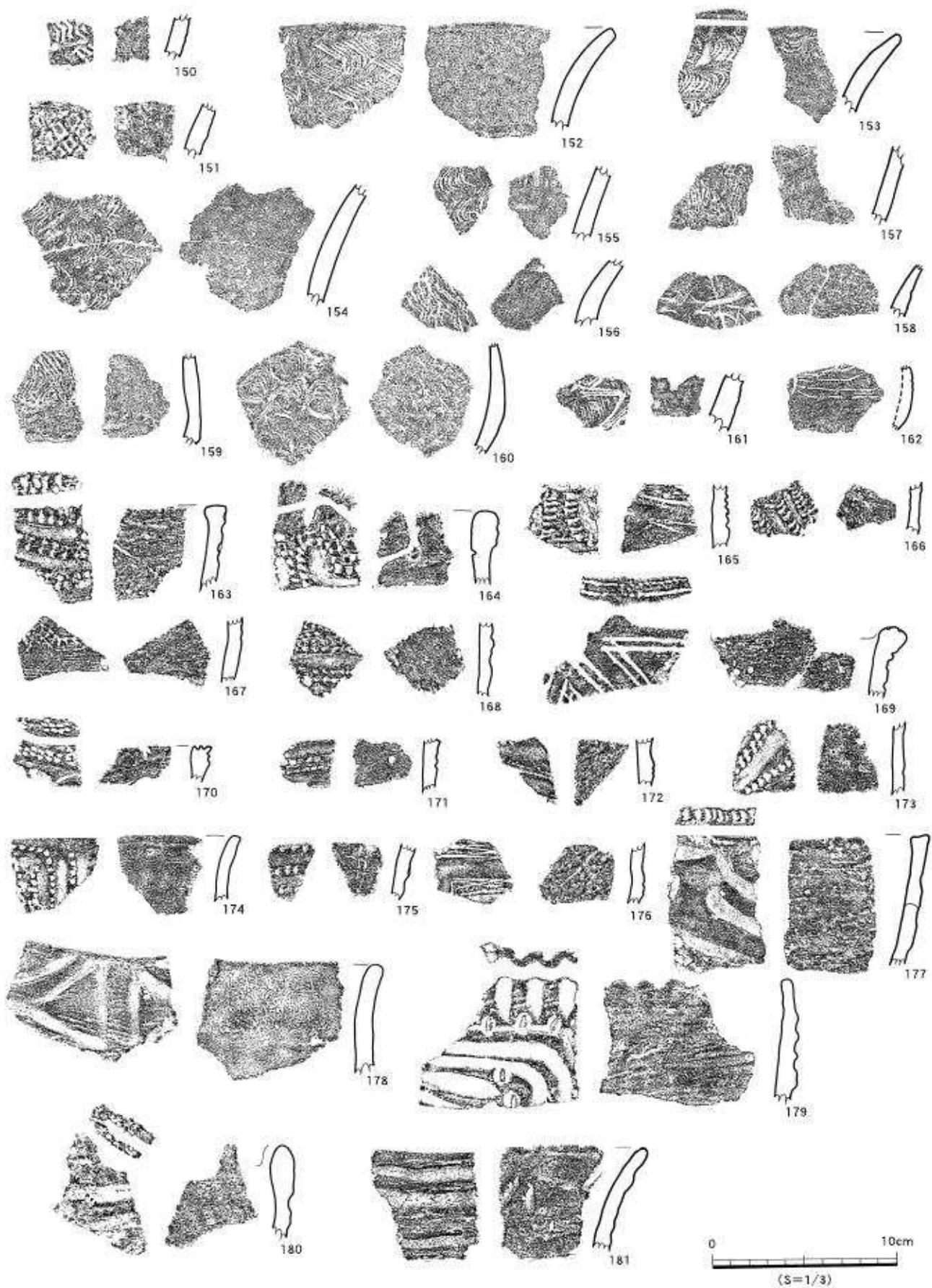
I類、150、151は押型文土器で150は山形、151は格子目である。152~161は変形燃糸文を器面に施す。162は器面に縄文原体を押圧している。

II類、163~176は、胴部に曲線的な凹線間に二列単位の施文具で連続刺突、押引文が施されるが163、169、170は口唇部に二列単位の施文具で連続刺突が施される。169は胴部に凹線が施されずヘラ状工具で鋭い直線的な押引文が施される。176は凹線間に沈線文が施される。163、166~168、172、176には滑石を混入している。

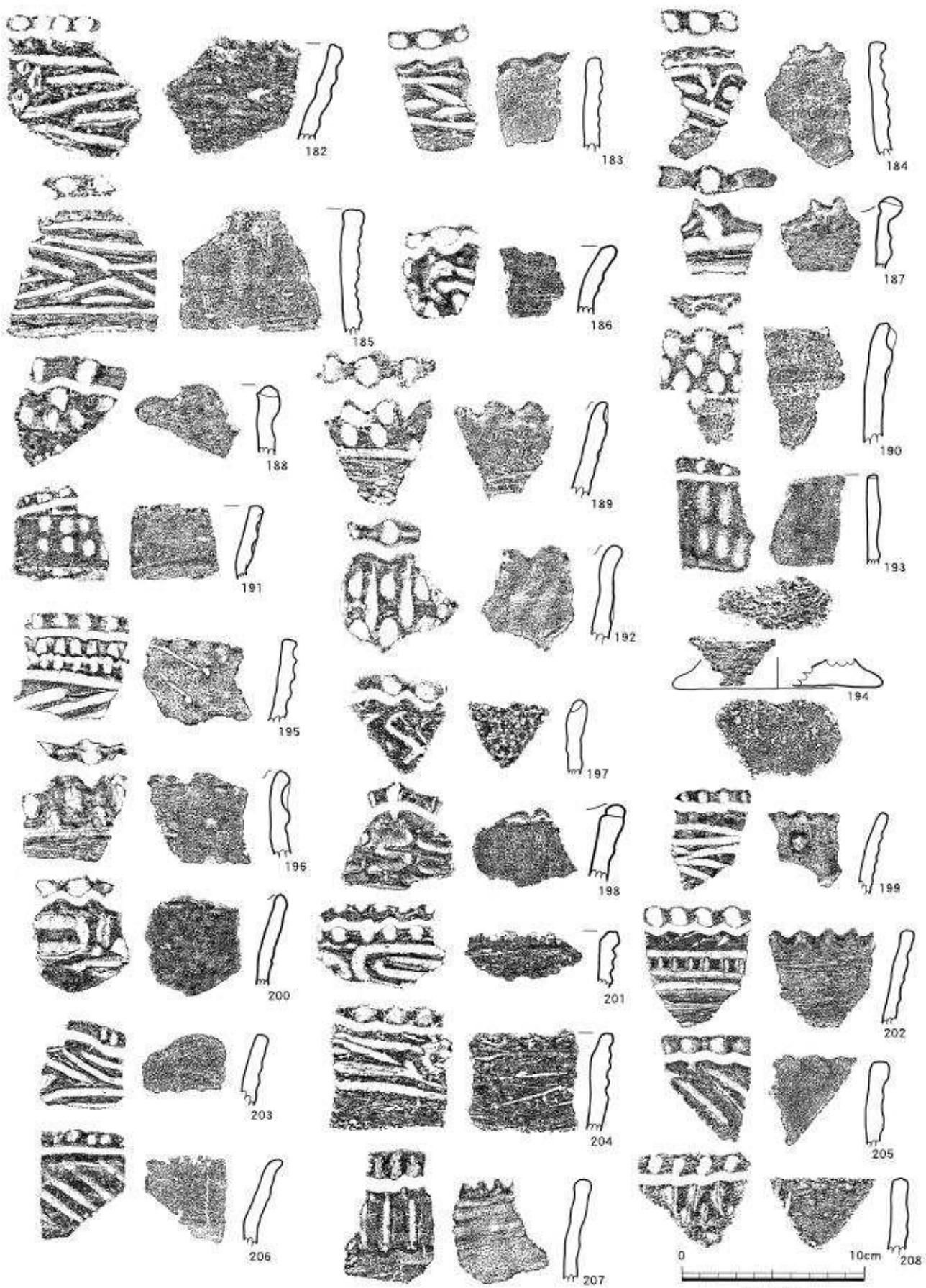
III類、177~290は阿高式土器、そこからつながる土器の一群を一括している。177~181は特に太形の凹線が施されるもので177は平坦な口縁部に刻みが施され、179は口縁部上位に表から縦位の凹線、裏から刻みを交互に施し口唇部が波形の形状となる。180は滑石を混入し、口縁部に突起をもち、口唇部に沈線が施される。182~193は口唇部に連続した凹点を施し液状にする、胴部文様はやや直線的な文様や凹点を施す。188~190、194は滑石を混入する。194は平底の底部片である。195~208は口唇部を指頭や棒状工具で押さえ波状にするもので、204

第41図 包含層遺物出土状況①

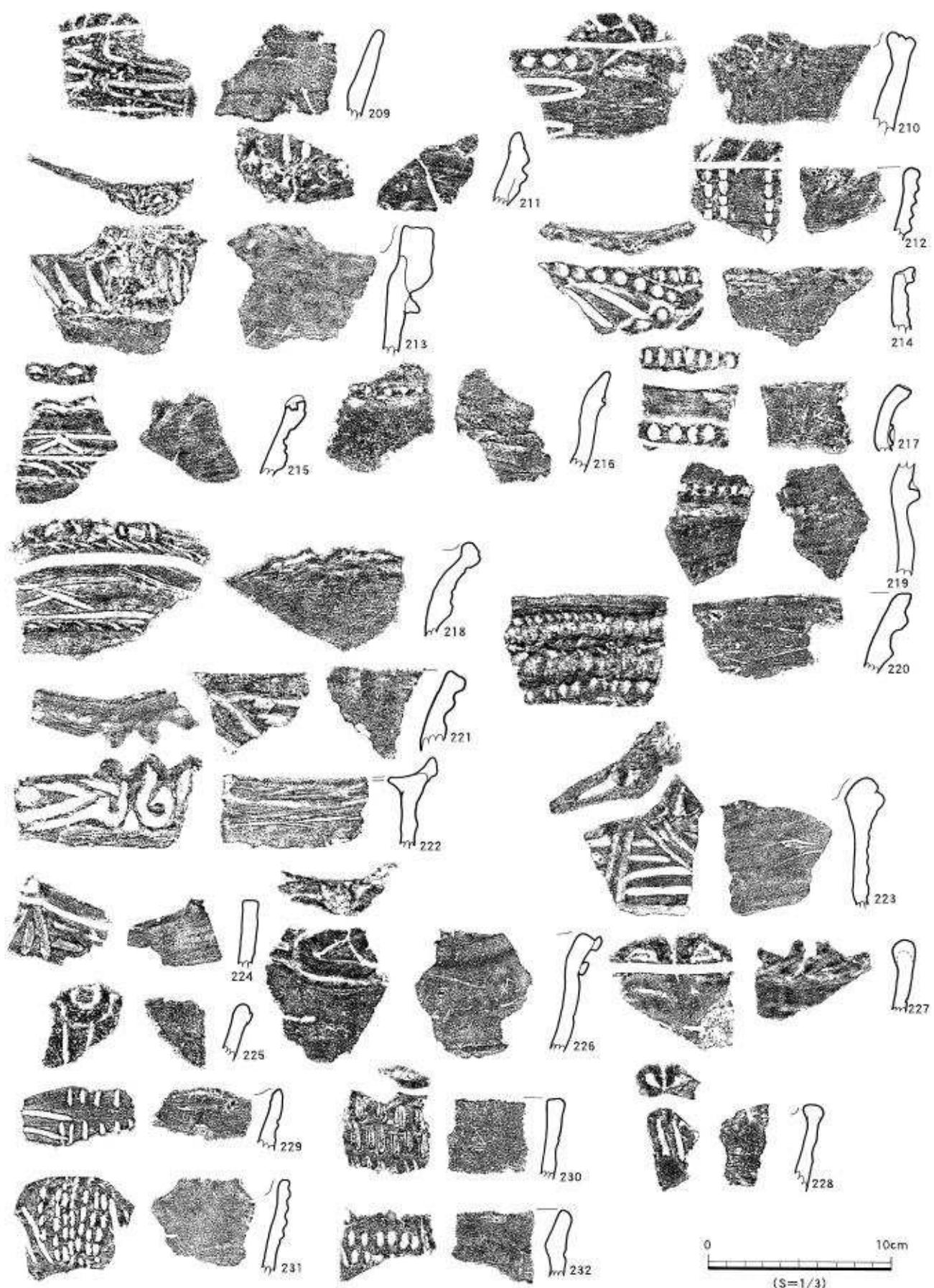
第42図 包含層遺物出土状況②



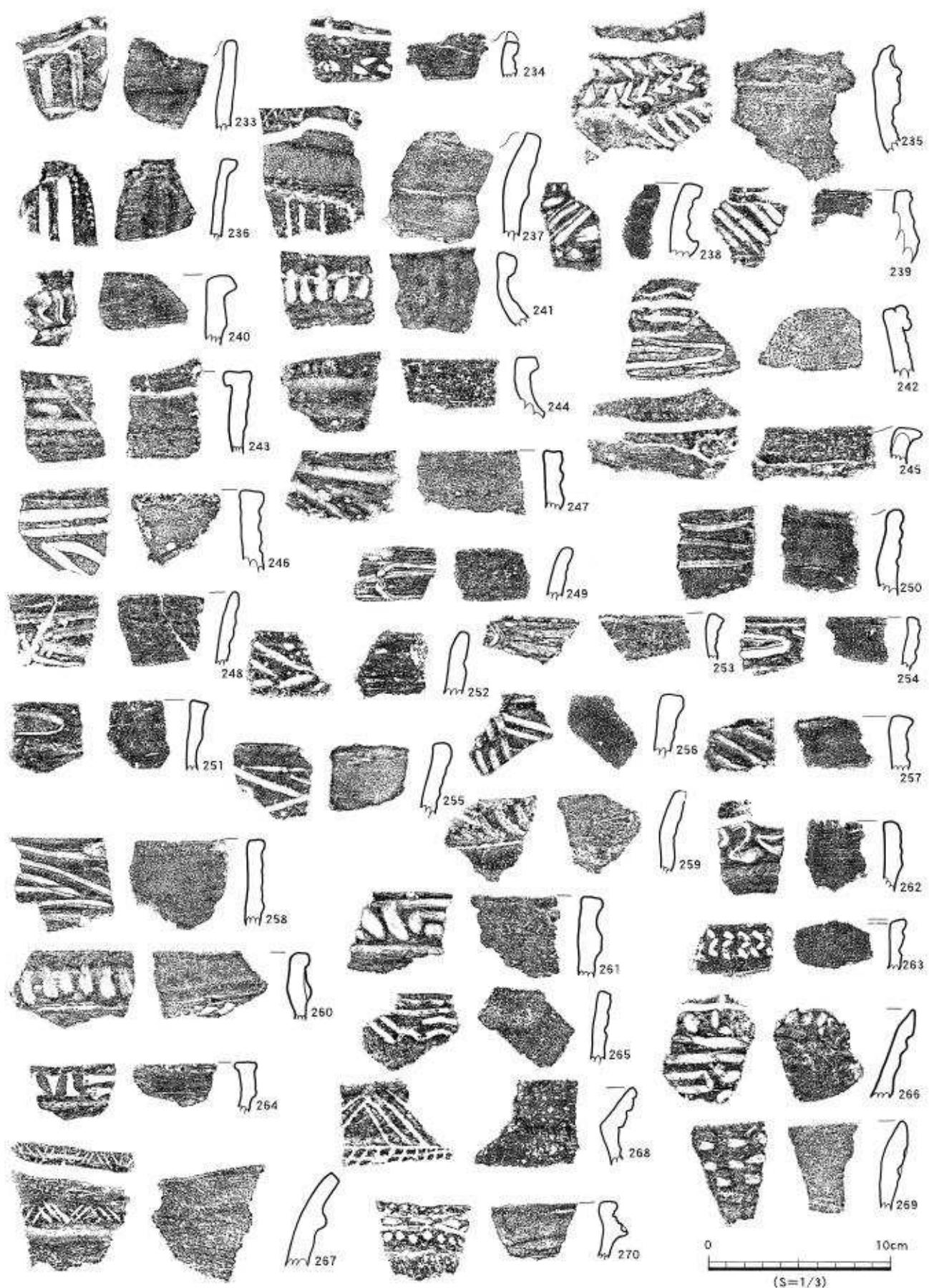
第43図 包含層出土遺物①



第44図 包含層出土遺物②



第45図 包含層出土遺物③



第46図 包含層出土遺物④

は口縁部を肥厚させ、そこに指頭による連点を施す。198・199は外面にS字状の凹線を施す。201は口唇部を表裏両面から互い違いになるようつまみ、口唇部を波状に仕上げる。205～208は口縁部外面に縦位、斜位の沈線を施す。209はねじり紐状、210は編み込み状の突起を口唇部にもつ、212は突起にはならないが口唇部に斜めの刻みを施しねじり紐状にしている。211、213～220は口縁部に突帯を廻らすもので、突帯上に連点や刻みを施す。220は突帯に文様を施さず、突帯貼り付けの際の指押さえ痕が顕著に残る。221は口縁部内面のみ強い屈曲がみえ波頂部をもつかもしない。222は口唇部内面側に粘土を貼り付け断面L字状にし口唇部に広い平坦面を形成する。口唇部から外側に張り出すような鶴冠状の突起をもつ。223～237までは口唇部に突起を設けたり、飾り突起をもつもので223、224～228までは紐状の粘土紐で飾る。229～232は口縁外面に短沈線を密に施した部分をやや突起状にする。235は口縁部外側に粘土貼り付けを行い、そこに羽状の沈線を施し飾り突起とする。238～245は口縁上端外面もしくは内面に粘土紐を貼り付け、平坦で広めの口唇部を形成する。246～258は口唇部等に特筆する特徴がなく口縁部外面に曲線文や斜線文、横線文を施す。259～264は口縁部をやや肥厚させそこに施文する。264は丁寧なで調整を施した後、削り込んだような、くさび形の文様を施す。267・270は口縁下位に突帯を廻らせる。267は口唇部と突帯上位に斜線文を施す。270は突帯に棒状工具で連点文を施し突帯下位は削りが行われる。鉢形を呈すると思われる。271は口縁下位に幅広の突帯を廻らせ、そこに横沈線、密な刺突文を施す、その上位は斜線文が入り乱れる。268は口縁部で外開きに屈曲し、屈曲下位に横沈線と斜沈線により格子目を施し、その上位に斜線文を施す。277～290は口縁部外面に縦位、斜位の細い沈線を施す。

IV類、291～403は口縁部断面三角形を特徴とする一群である。291～296は口唇部を平坦にすることにより断面三角形状を作出している。口唇部に沈線が廻り細かい刻みが施される。297～352は口縁肥厚部に斜位の刻みや沈線、貝殻腹縁刺突、横走沈線などを単独で施す。297～317が斜位の刻み、沈線を施すもの、318～338が貝殻腹縁刺突を施すもの、339～350は横走する沈線を施すものである。351・352は口唇部と突帯部上位に刻みを施す。353～403は複数の施文を行うものである。353～355は口唇部に刻み目を施し、口縁部に沈線を廻らせる。355は波頂部の口縁外面にポイントとなる凹点を付け、さらに内面に波形の沈線を施す。356～379は口縁端部外面と突帯部に刻みを施し、その間に沈線もしくは太めの凹線を廻らせるもので、359には波頂部に橋状把手が付く。362・363・368・379は凹線端部にポイントとして刺突を施す。366・367・369・370は凹線端部にポイントとして凹点を施す。380～385は沈線が曲線的なものである。383・384は波状の凹線を施す。386～395は口縁端部外面、突帯部もしくはその両方に刻みを施し、その間に貝殻腹縁により刺突を施すもので、沈線を伴うものもある。396～403は断面三角の肥厚帯幅が短いものである。396～400は沈線が施され沈線間に貝殻腹縁刺突が施される。402は貝殻腹縁刺突により横位の沈線状の文様を施す。403は斜位の貝殻腹縁刺突を行い、その中ほどに深い連点文を施す。

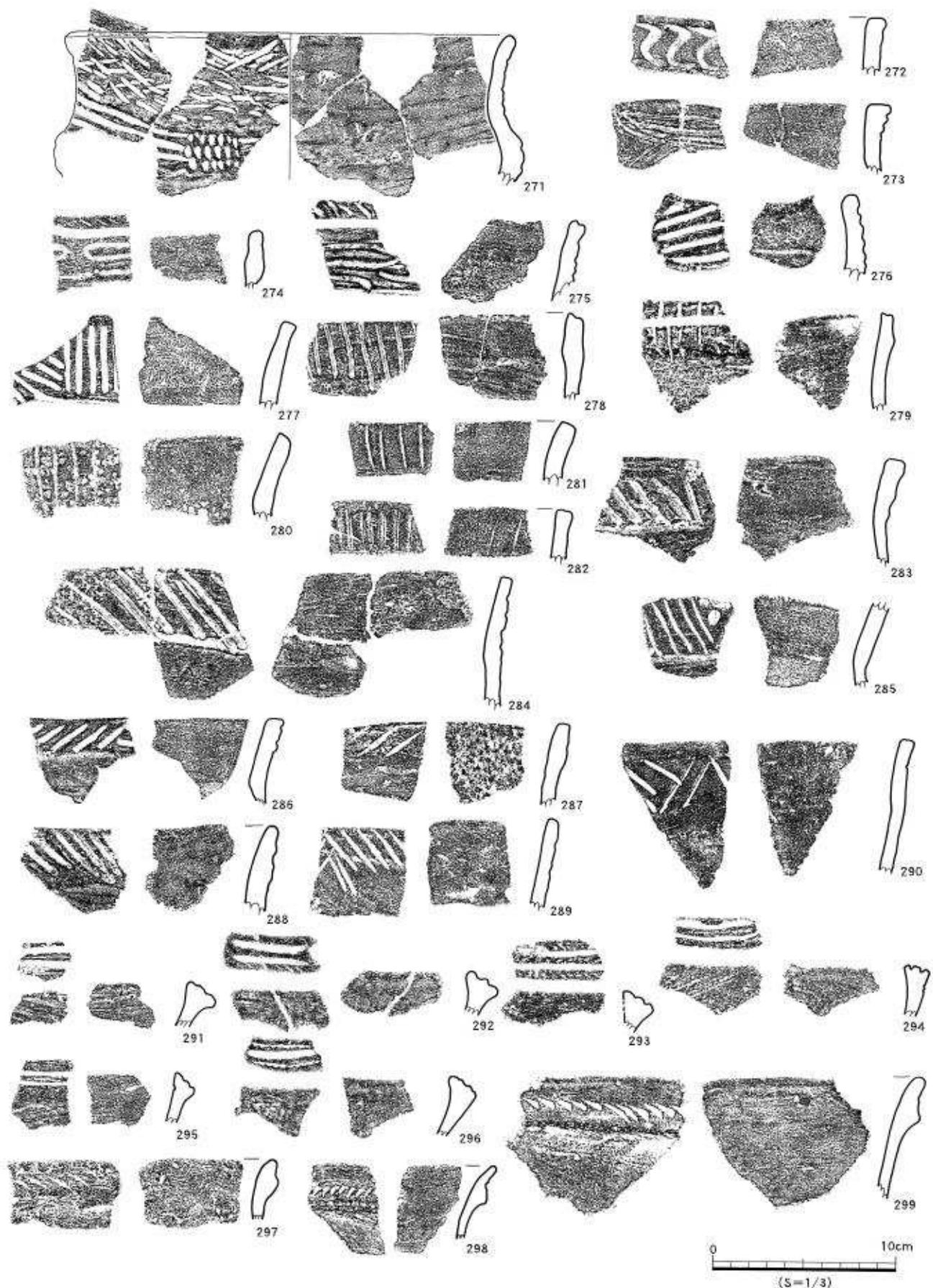
V類、404～446は断面くの字状を呈し、器面に条痕を残し、貝殻腹縁刺突により文様を施す。404は口縁部に刺突と沈線を伴う。407は波頂部であり、くの字屈曲の度合いが高く、上面観が四角形を呈すると思われる。414～416、418・419、424、432・433、443は胎土に白色粒、金雲母を多く含んでいる。445は貝殻刺突を羽状に施す。439、446は貝殻刺突の下位に棒状工具で連点を施す。

VI類、447～453は口縁部がやや内弯した形状を呈し沈

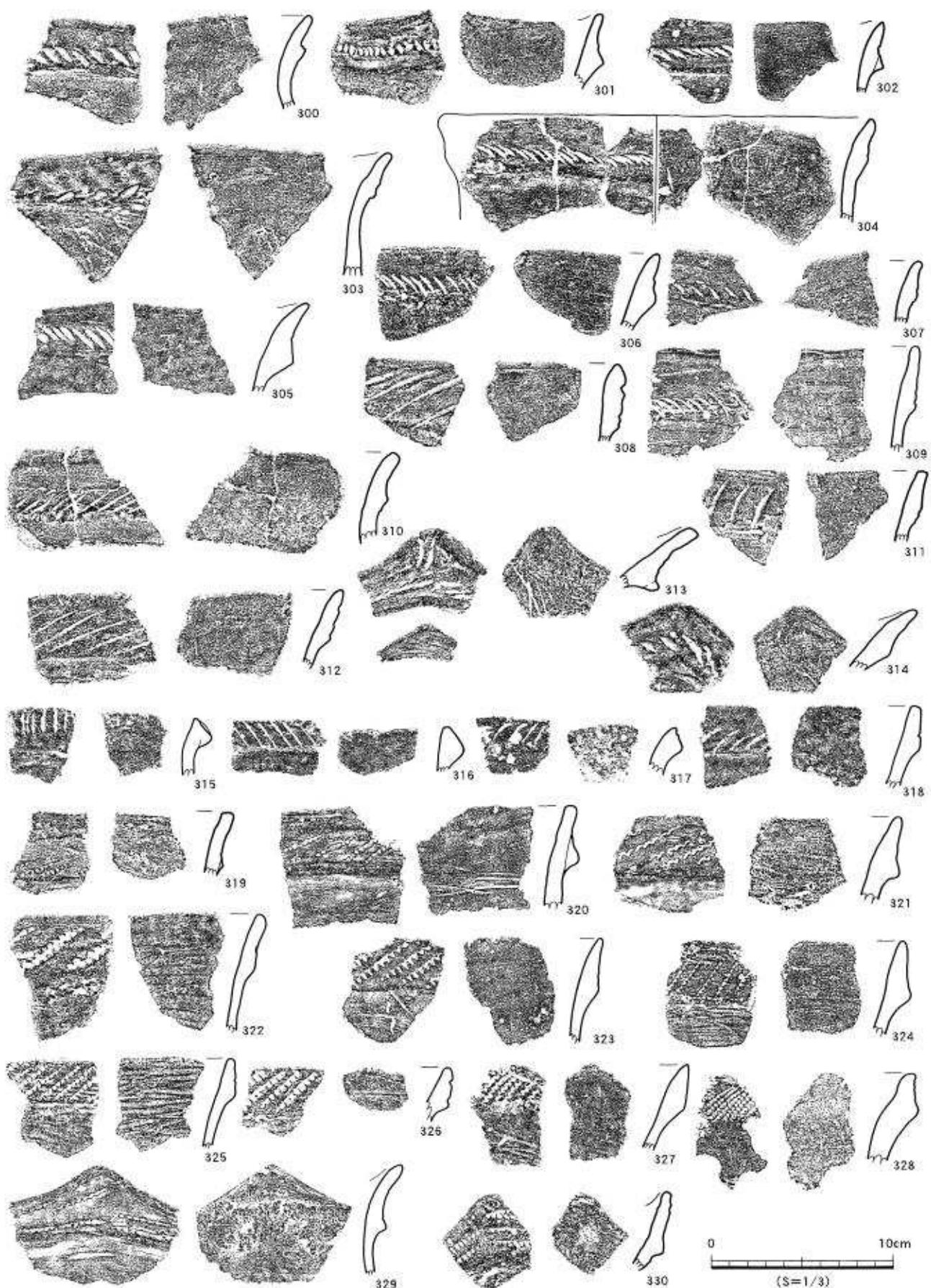
線間に貝殻腹縁刺突を施す。448は沈線間に連点文も施す。452は胴部にボタン状のボッチをもち、そこに刺突を施す。453は沈線間に間延びした縄文状の施文が見える。

VII類、454～580は磨消縄文を施す一群で、小池原上層式土器と鐘崎式土器を一括している。454・455は口縁部が真っ直ぐ上に伸び、太めの沈線間に縄文を施す。456・457は頸部で屈曲し口縁が斜め上方にすっと伸びる。458～461、463は口縁端部がRをえがき口唇端部が小さく上方へ立ち上がる。462～581は口縁部がL字に屈曲して、口唇部が平坦となり、そこに沈線文と刺突文を施し、口縁下位に沈線文、渦巻文、磨消縄文を施す。462、463～483はL字に折れ曲がった口縁外面に沈線が廻る。464～467は口唇部に外側に突起が付く。481は口唇部文様が羽状の沈線となる。484～497は胴部沈線間に磨消縄文を施す。496は橋状把手部である。498～534は胴部沈線間に縄文を施さない。511は口唇部にビーズ状の突起をもち、そこに穿孔を施す。512は口縁部が内傾し外面に渦巻文と刺突文から伸びる緩い弧状の沈線、さらに棒状工具での押引による沈線を施す。513～517は橋状把手部である。518～525は口唇突起部で518～523は突起部に穿孔や刺突を施す。535～548は浅鉢の形状を呈する。538は口唇に突起部をもち、外面の縄文、口唇部の沈線、細かで密な刺突を施し丁寧な作りである。549は肩部に穿孔こそないものの注口状の突起をもつ、剥落しているがその右側にも同様な突起が付くものと思われる。胴部には渦巻文、磨消縄文も確認できる。胎土には白色粒を多く含む。550～580は胴部片で、550～566は縄文を施す。567～580は縄文を施さない。

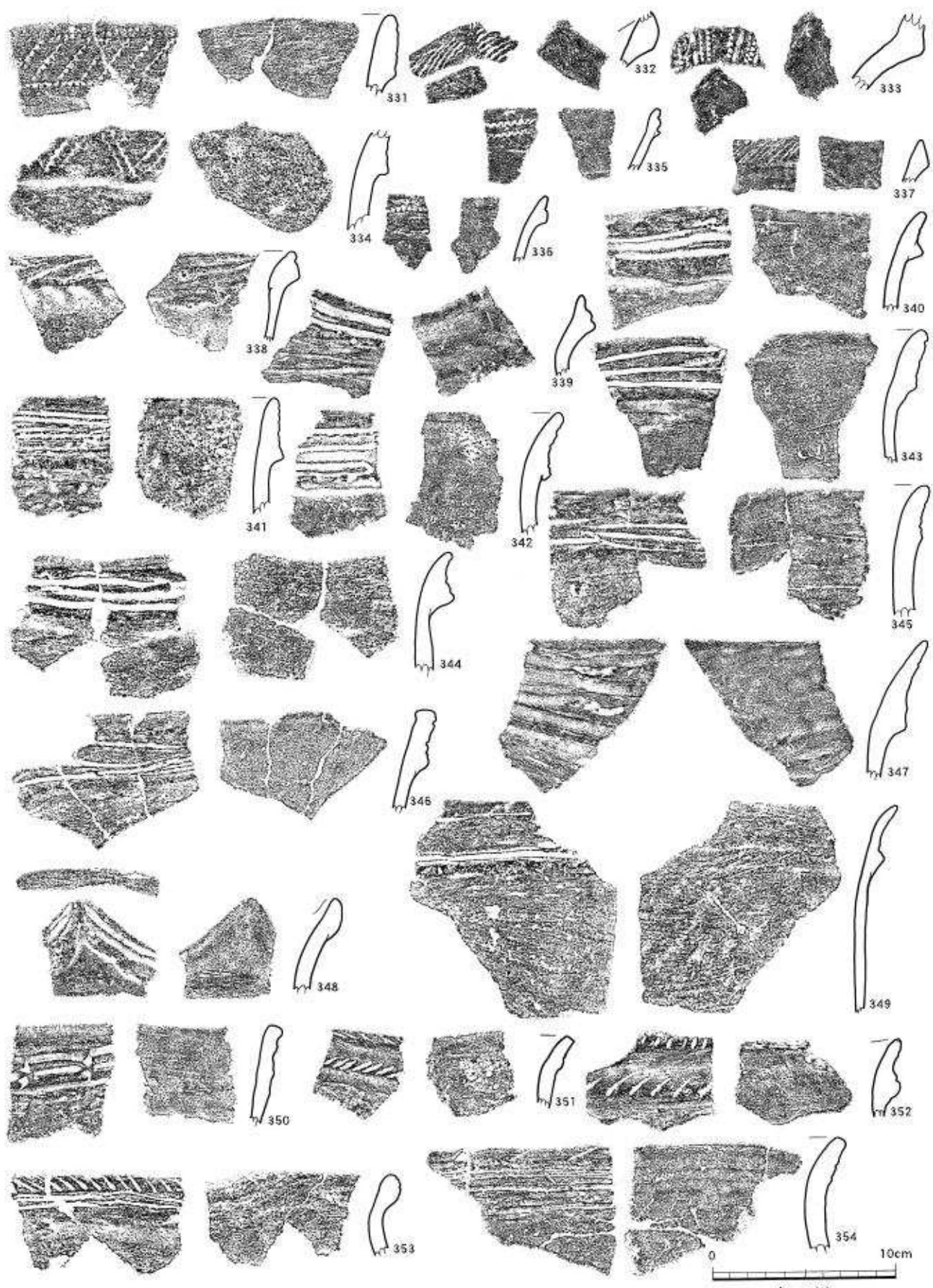
VIII類、従来、北久根山式土器と呼ばれてきた土器である581～598は緩くカーブする短い頸部をもち、口縁部上端から口唇にかけて縄文を施す。口唇部平坦面は狭くそこに細い沈線を廻らすものもある。585は内外両面に縄文を施し器面に穿孔を施し、そこから垂下する沈線を内面に施す。586～589は口唇部にビーズ状の突起をもちそこに穿孔を施し、内面に沈線を施す。589・608は口唇部に鐘崎式土器に類似した刻みが施される。590は口唇部に細い沈線がかすかに見える。胴部に沈線を施し、沈線間に縄文押圧による施文を施す。591～593は橋状把手部及びその近辺と思われるもので、橋状把手の付く内面には左右対称の刺突から始まる曲線状の沈線を施す。594～598は頸部がやや伸びるもので、口唇部に縄文を施す。599～607、609は頸部が長く伸びるもので口唇部に縄文が施される。頸部外面はミガキにより丁寧に仕上げる。607は内面に刺突、沈線が施され、沈線間に縄文を施す。610～650は胴部片で沈線間に縄文を施す。620、622、624、627・628、634、637の縄文施文部、沈線内の一部には赤色顔料がわずかに残る。651～746は深鉢の口縁部片である。651～663は口唇部から口縁部上位にかけて斜位の沈線を施す。651・652は口唇部にW字状の貼り付けを施す。665・666は羽状の沈線を施す。668～675は口縁上位に2条の沈線を廻らす。668～670は口唇部に細かい斜位の刻みを施す。674・675は沈線間に縄文を施す。678は胴部片である。679～730は口縁部下位に断面三角形の突帯を貼り付け、突帶上に斜位の刻みを施す。679～714はヘラ状工具で刻みを施す。679～688は口唇部にW字状の貼り付けを施す。688～693は口唇部から突帶にかけて縱方向の飾りを施す。692はS字状の貼り付けを施す。703～705は口唇突帶間に波状の沈線を施す。715～726は突帶上に貝殻腹縁による刻みを施す。721、725・726はボタン状のボッチが付きそこに刺突を施す。727～734は口縁部に沈線を廻らすもので、732は器形が異なり口縁部が内弯する。735～745は外面が無文のもので、735、737～740は口唇部にW字状の貼り付けを施す。741は貼り付けを行わず、W字を意識した沈線が施される。746は口縁部が内弯し器面に縄文を施し、



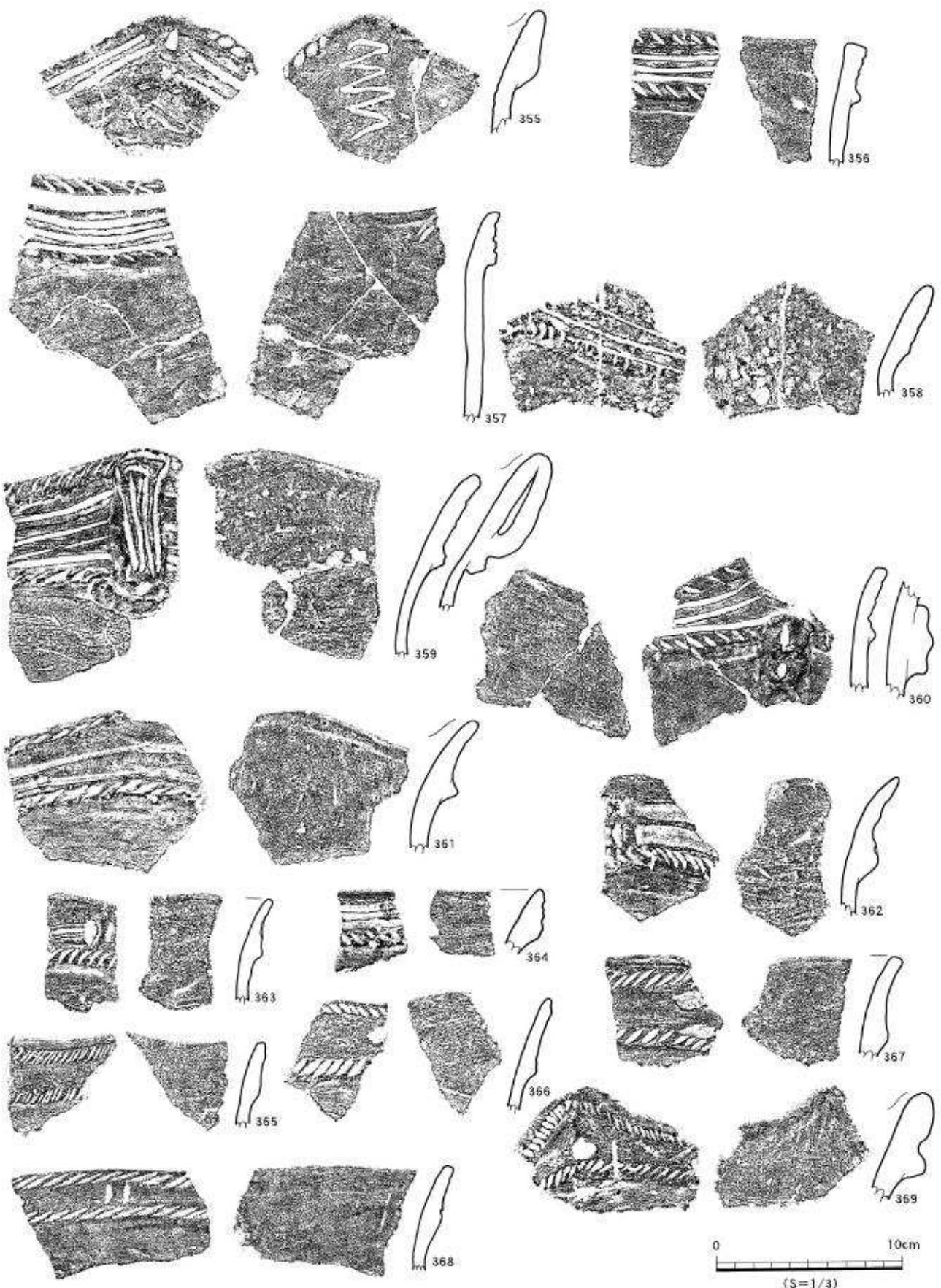
第47図 包含層出土遺物⑤



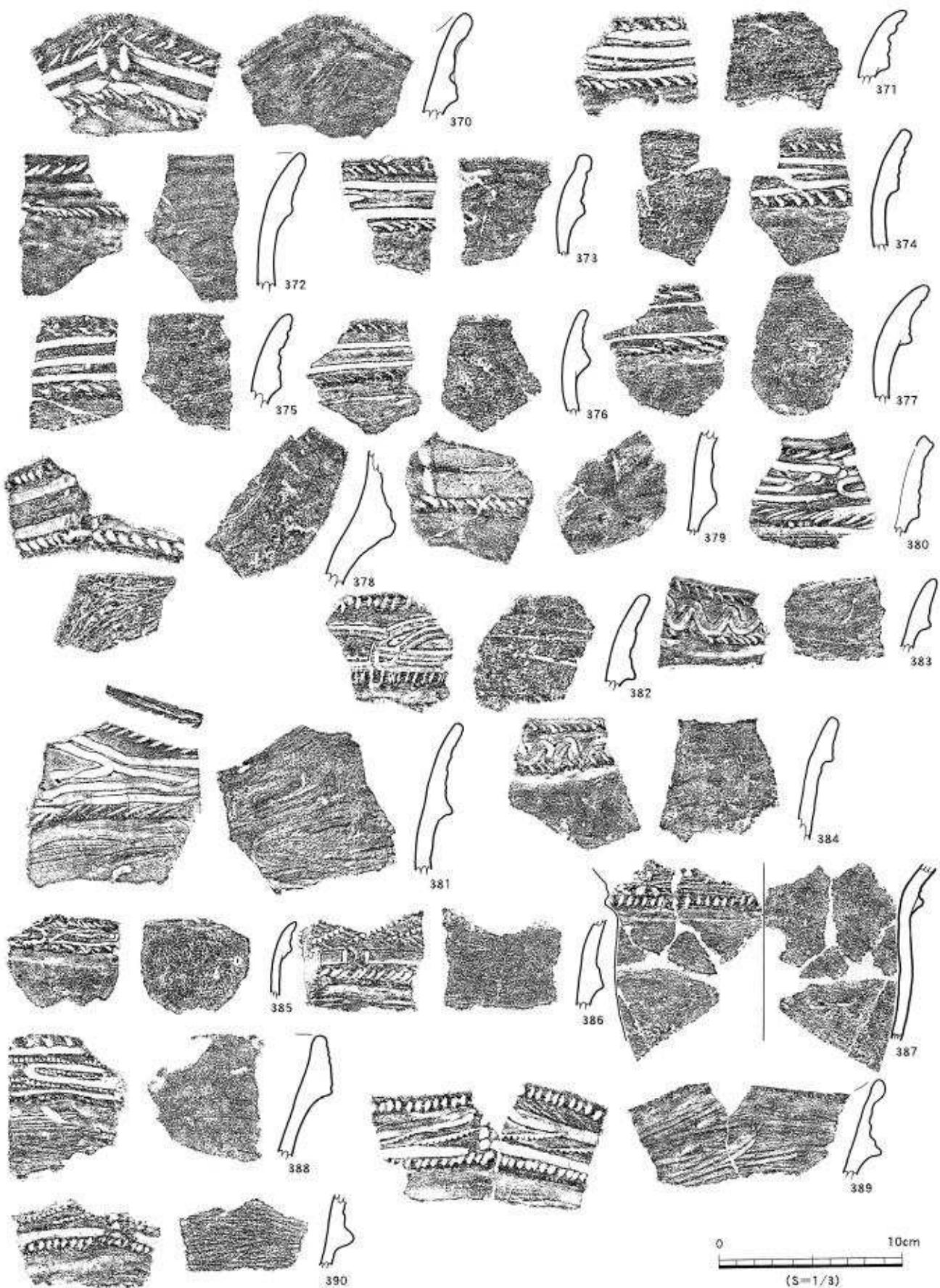
第48図 包含層出土遺物⑥



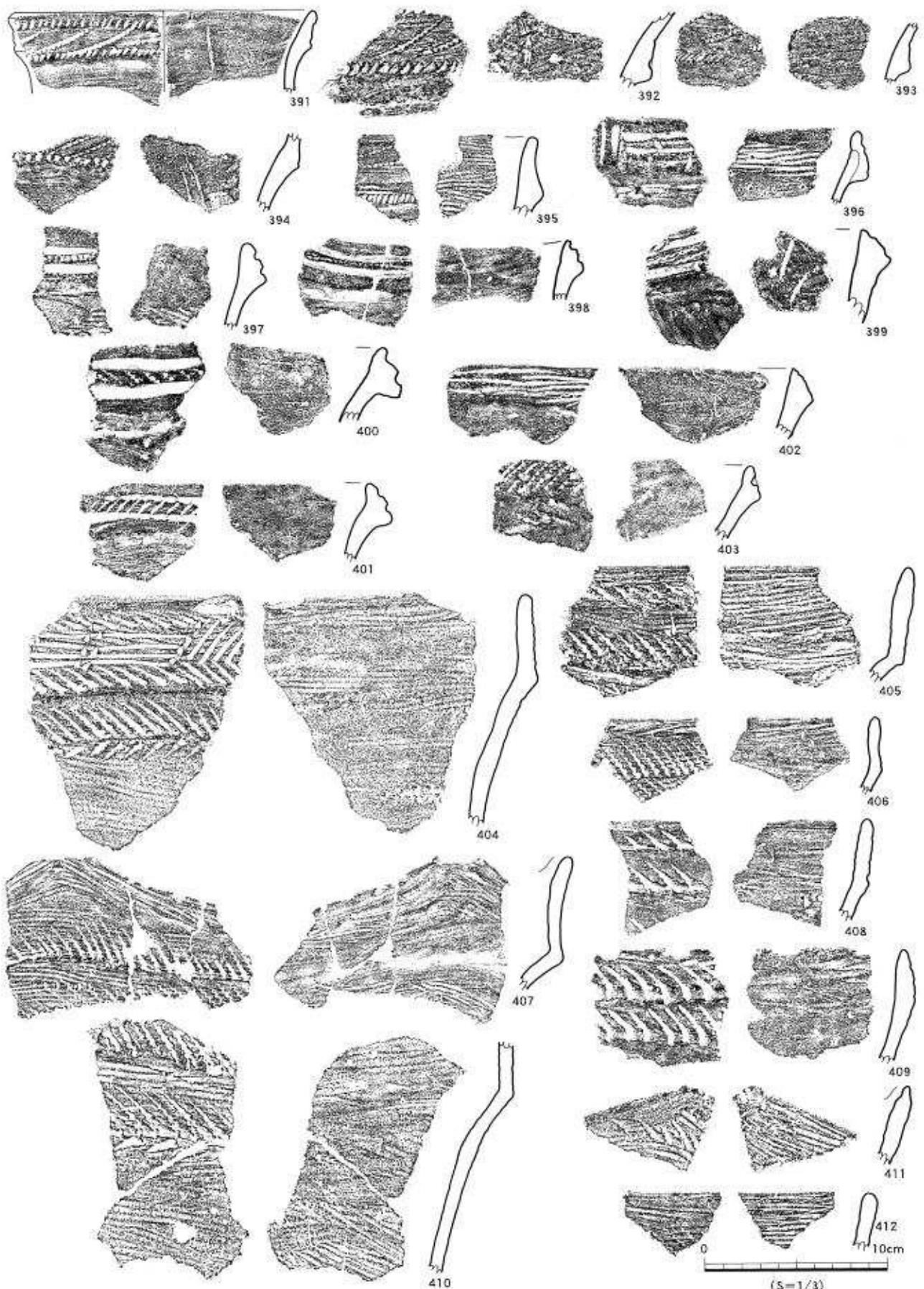
第49図 包含層出土遺物⑦



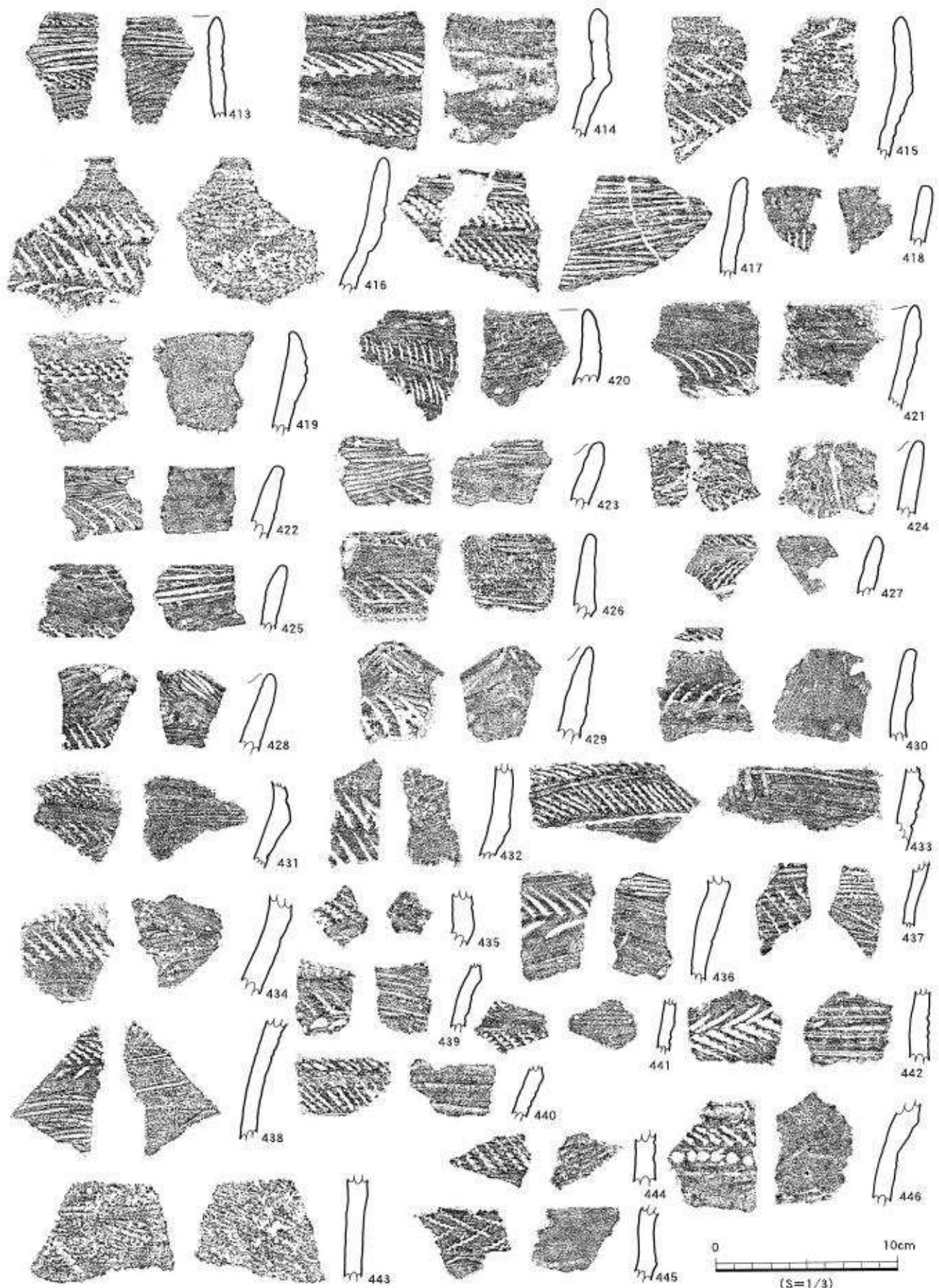
第50図 包含層出土遺物⑧



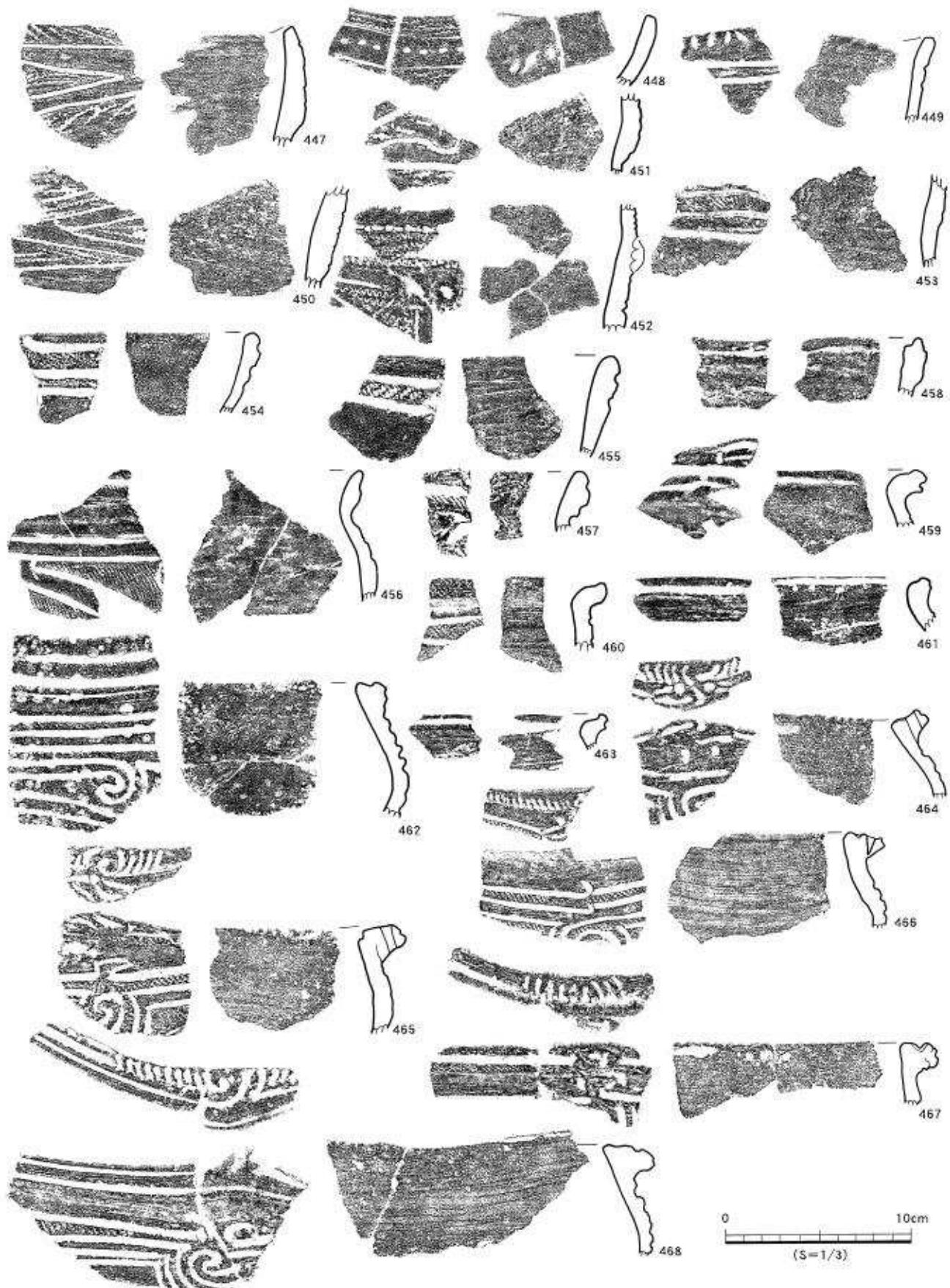
第51図 包含層出土遺物⑨



第52図 包含層出土遺物⑩



第53図 包含層出土遺物①



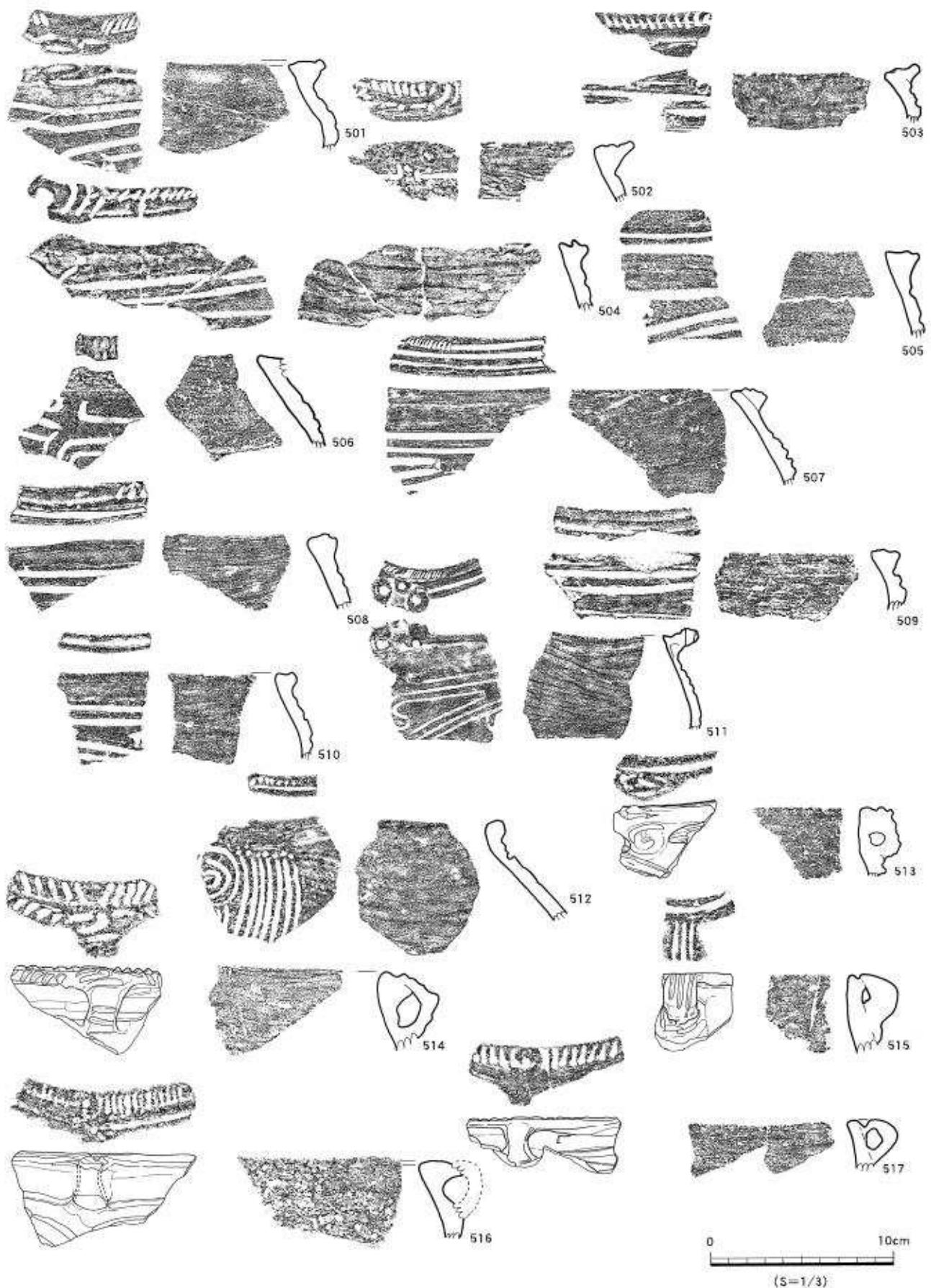
第54図 包含層出土遺物⑫



第55図 包含層出土遺物⑬



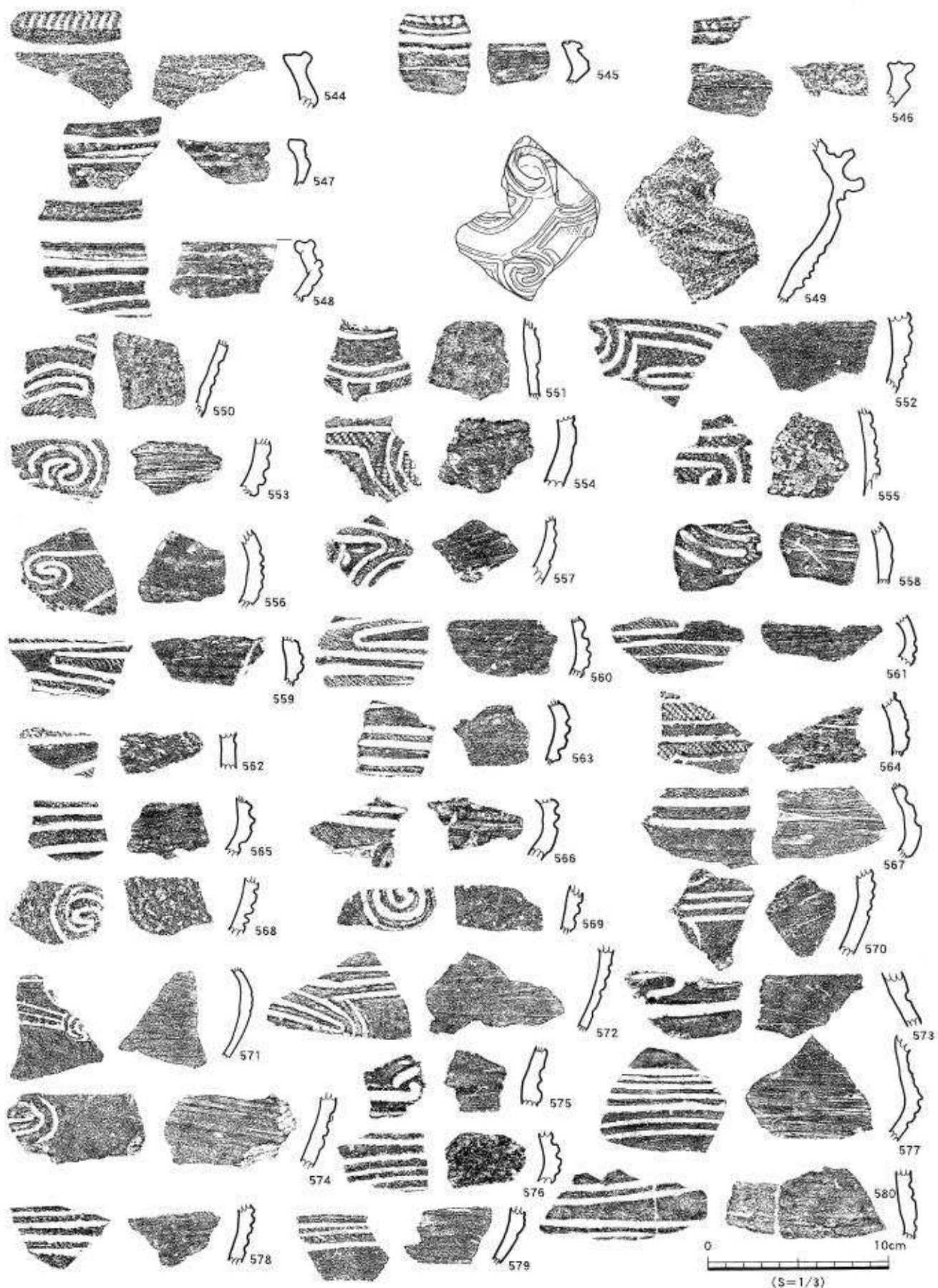
第56図 包含層出土遺物④



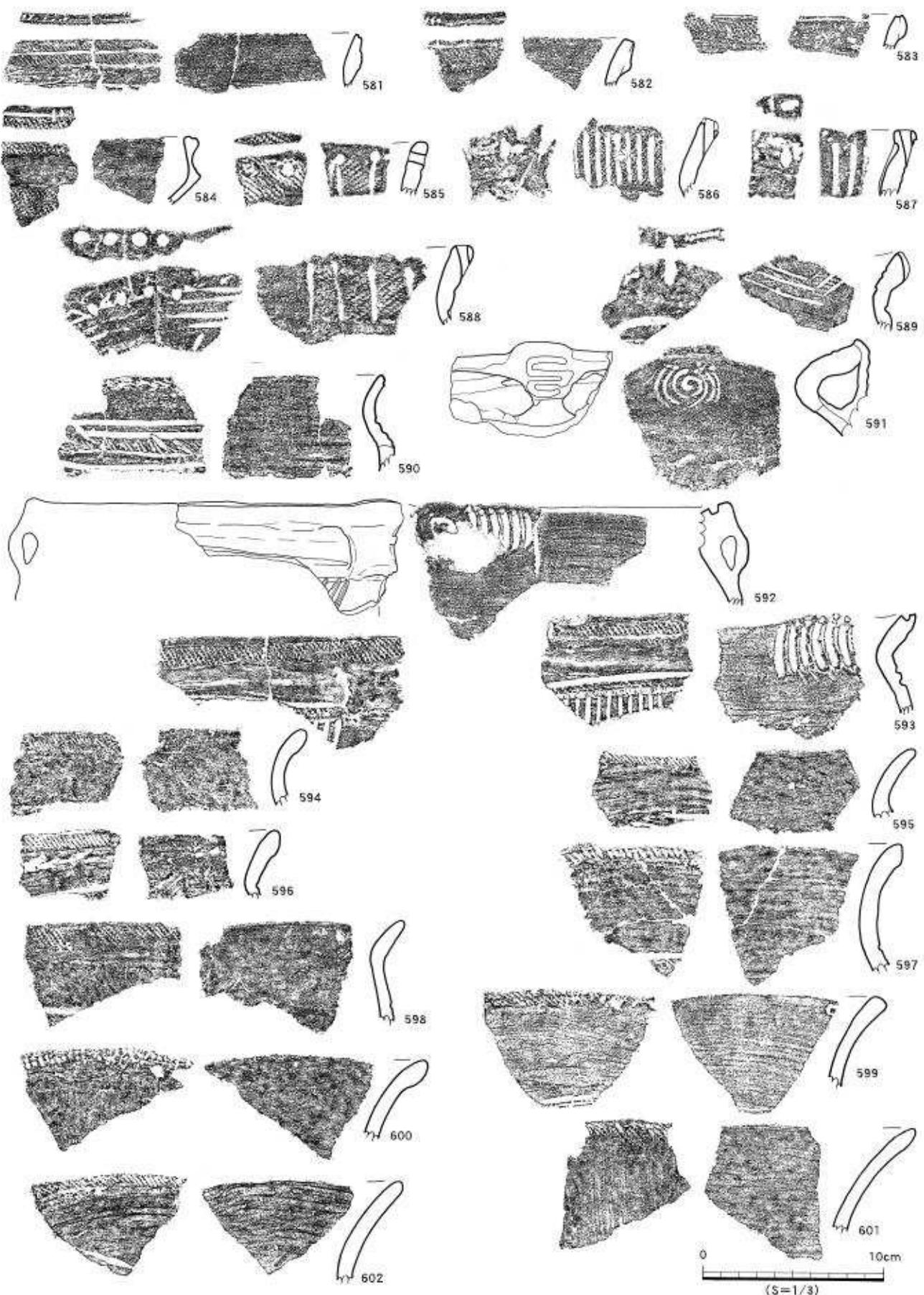
第57図 包含層出土遺物⑮



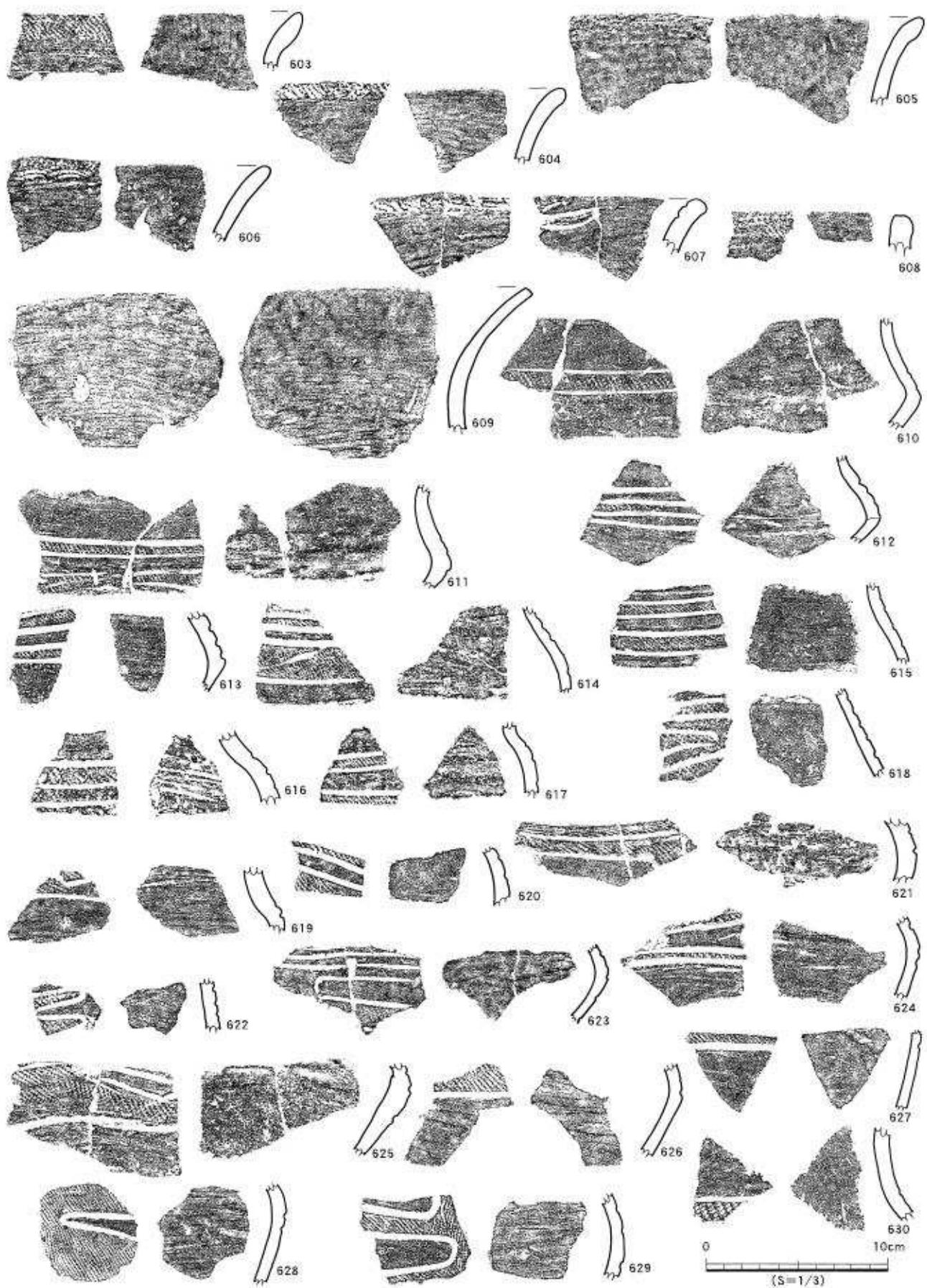
第58図 包含層出土遺物⑩



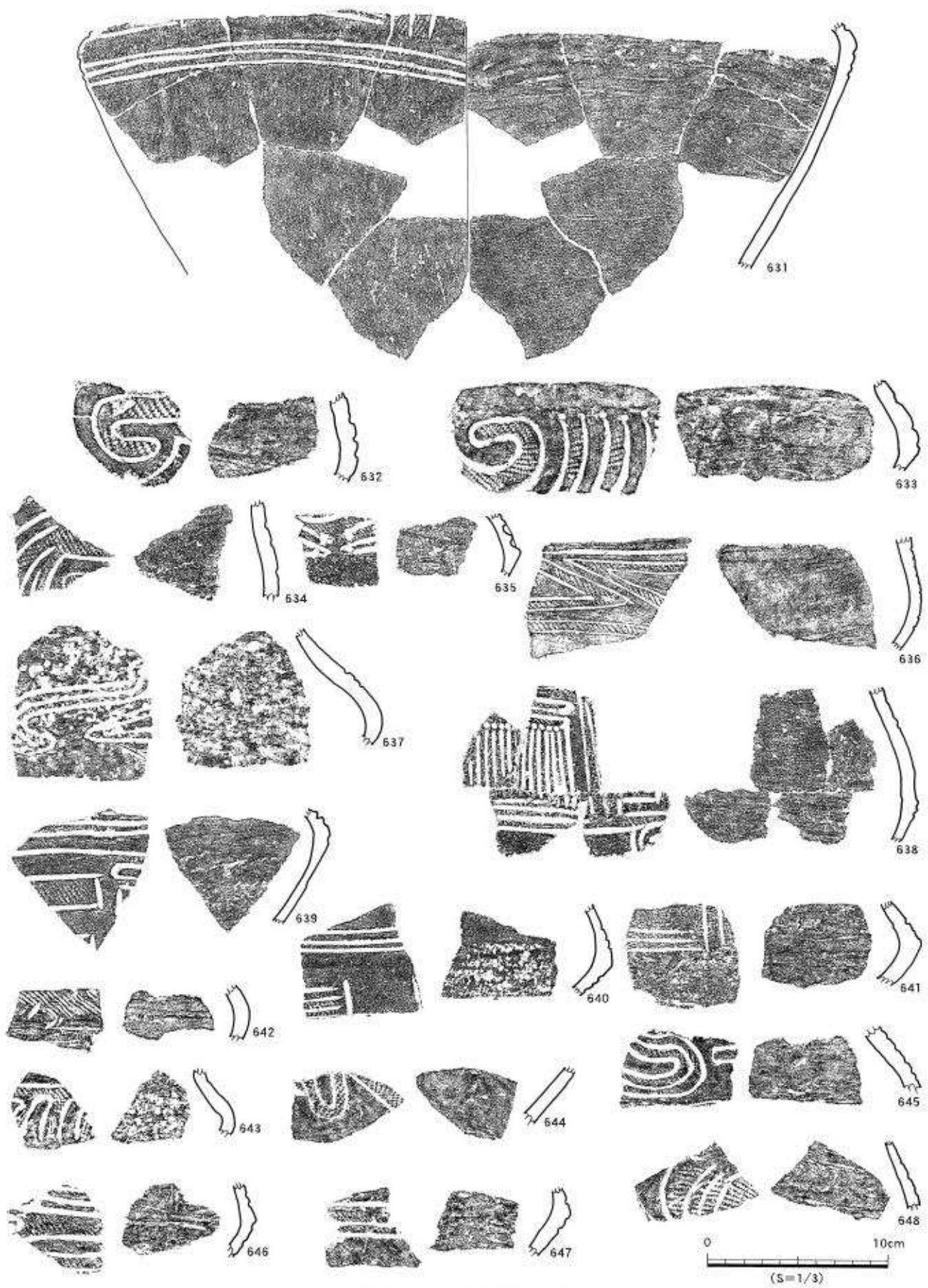
第59図 包含層出土遺物⑯



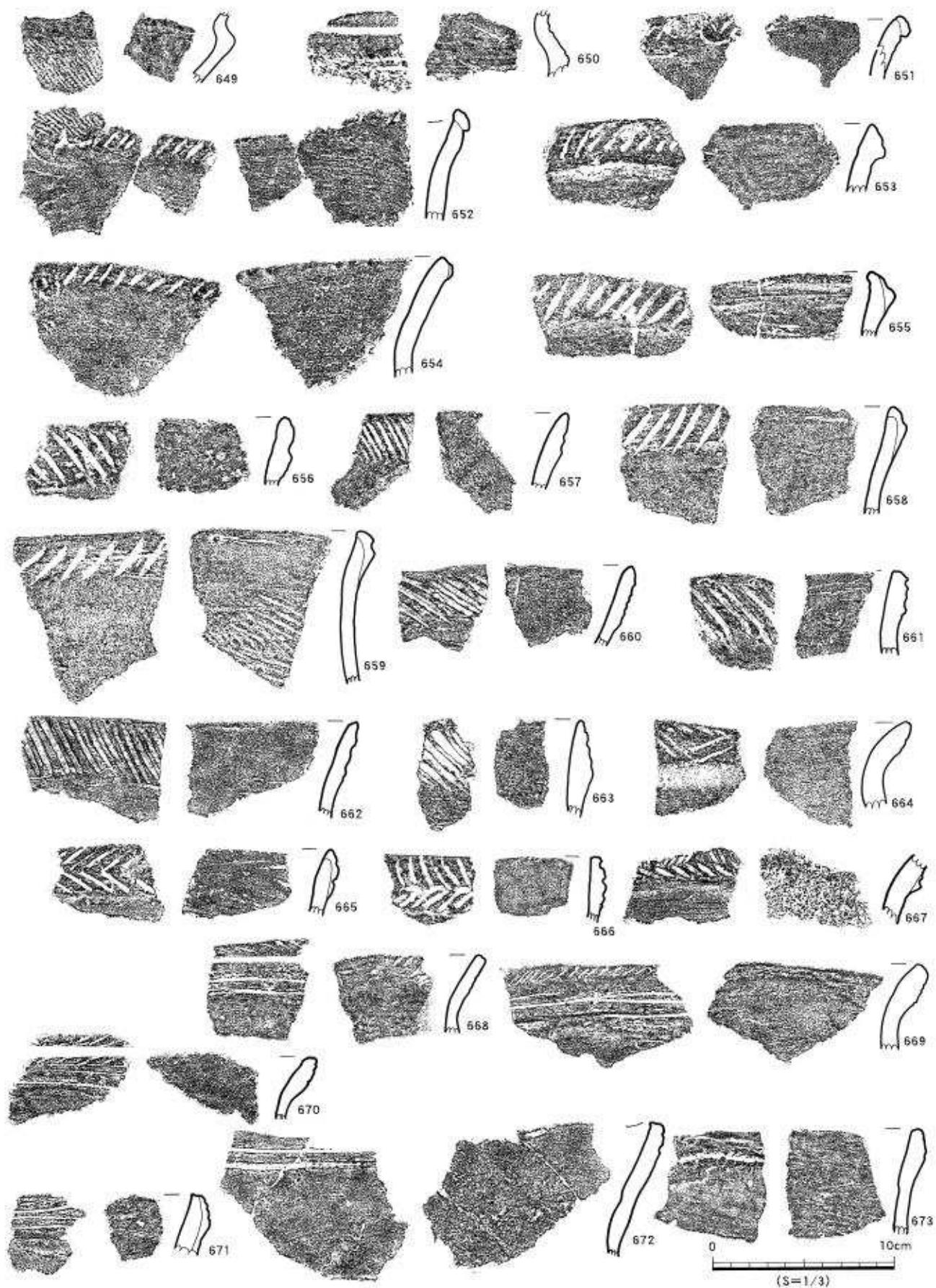
第60図 包含層出土遺物⑧



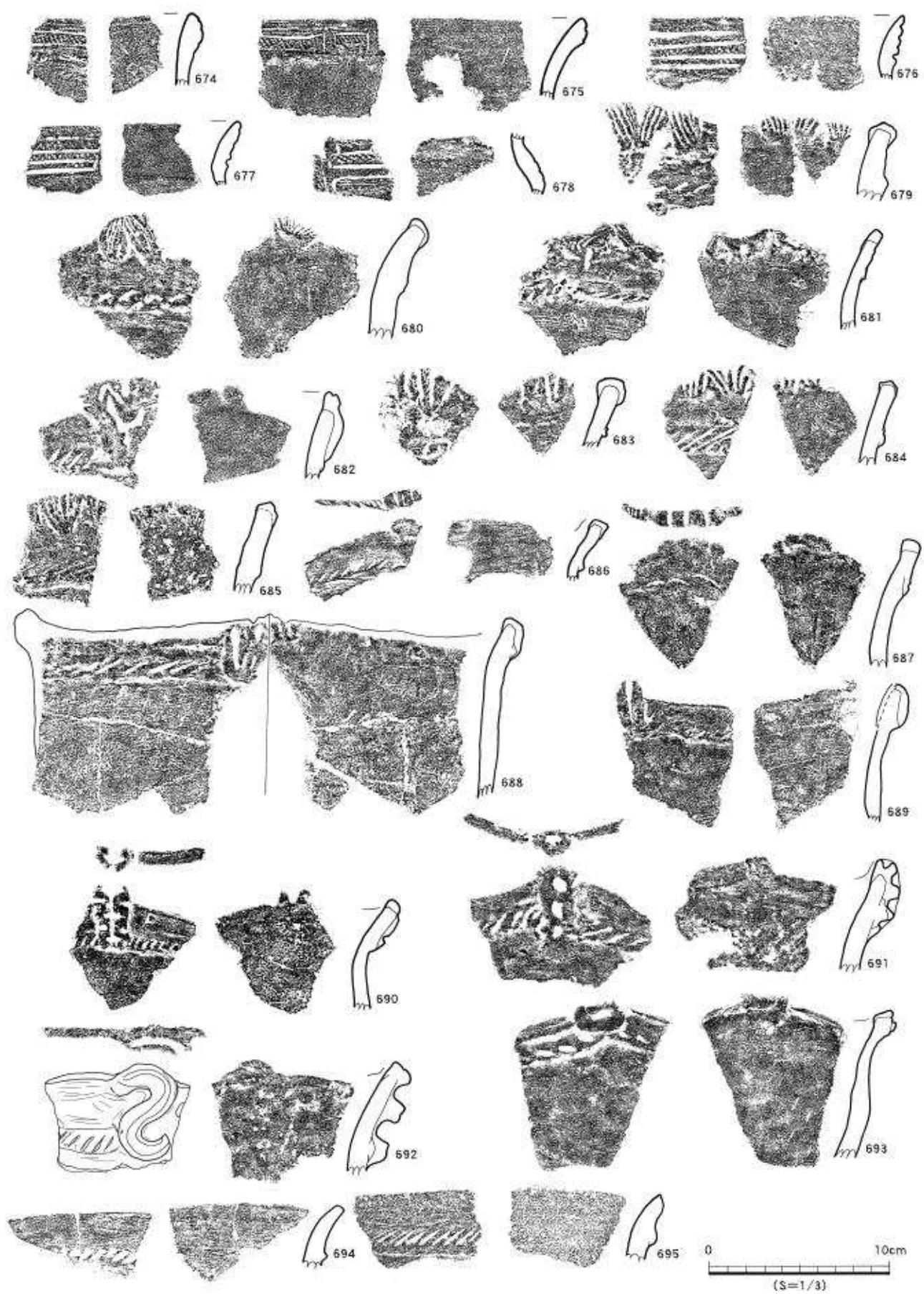
第61図 包含層出土遺物④



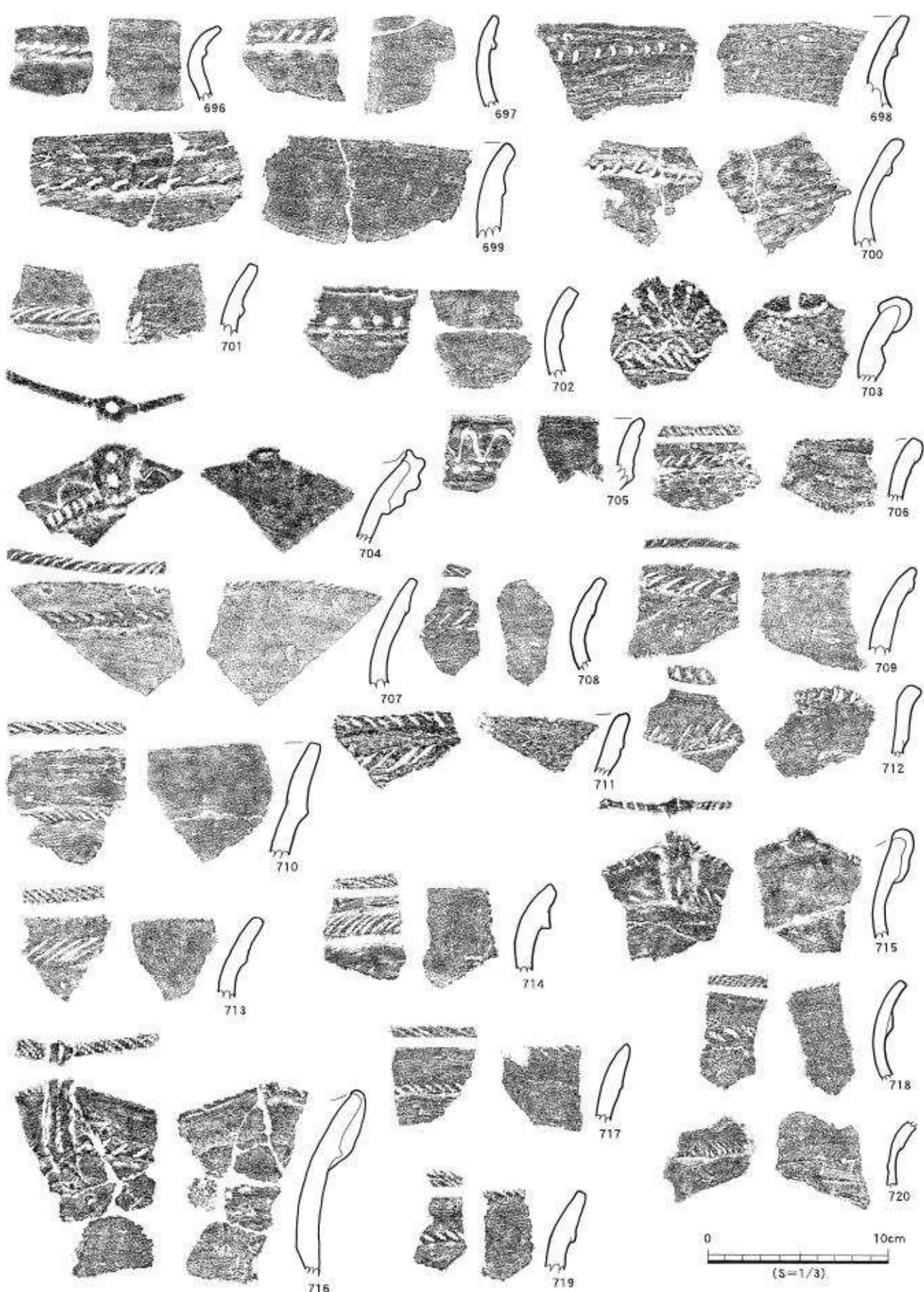
第62図 包含層出土遺物②



第63図 包含層出土遺物②



第64図 包含層出土遺物②



第65図 包含層出土遺物②



第66図 包含層出土遺物④

口唇部から垂下する沈線と縄文を施した貼り付けを行う。747・748は浅鉢形を呈すると思われる。749・750は皿形と思われる。751は口唇部に1カ所刺突を施す、ミニチュア土器と思われる。752～753は脚部片で底部が抜けている。754は貼付け底が脚部から抜け落ちたものと思われる。

IX類、755～781はやや内湾する口縁部と、緩やかなカーブをえがく胴部をもち、口縁部と胴部に沈線、沈線間に縄文を施す。従来、辛川式土器と呼ばれている。755～776まで口縁部片でいずれも緩やかに内湾する形態である。755・756・761・762・764は波状口縁を呈する。755・756は波頂部に刻みを施し、その下位、文様帶中央に弧状沈線を施す。757～760、763、765～776は平縁口縁を呈し、757は沈線間の縄文がやや太めである。766、770は沈線間に縄文を施す。769、771は条痕状の沈線である。774は口縁部の内湾が強くキャリバー状を呈する。777～781は胴部片である。778は胴部屈曲部に連続刺突を廻らし、779～781は同部位の沈線間に連続した沈線を施す。780は沈線間に鋸歯状の沈線を施し、781では細い横走沈線に縦に縦位の短沈線を施す。

X類、782～807は口縁部、頸部の屈曲がシャープで頸部屈曲部内面には稜がみられ、器面には沈線、縄文刺突などの施文が施される。783～792は口縁部片で、783～789は波状口縁を呈し、783・785・787は波頂部にV字の刻みを施す。790～792は無文である。口縁端部内面に指押さえによる凹線状のくぼみがはっきりし頸部の屈曲が強くなるものと判断した。793～801は胴部片である。794・795・799～801は施文パターンの変化点で、沈線間に凹点や対向弧文が施される。802～807は当該土器の底部と考えられるもので、いずれも底径が小さい。

XI類、808～811は三万田式土器である。外反する口縁部に太めの凹線が多数廻る。811は胴部片でそろばん玉状の器形を呈し、屈曲部外面に細かな刻みを施す。

XII類、812～814はやや内湾しながら外開きする深鉢の口縁部で外面に数条の沈線が廻る。815は口縁が大きく外開きし口唇端部が小さく立ち上がる、浅鉢の口縁部である。816～819は丸い胴部に短い口縁部が立ちあがり、口唇部が丸くなる。820は深鉢と思われる。口唇直下外面に沈線が廻り、口唇部にリボン状突起が付く。一部に赤色顔料が残存する。822は口縁部が内湾し、口縁と胴部の境で段をもつ。823は胴部外面に三叉文が描かれる。その沈線中には赤色顔料がわずかに残る。824～831は器面に比較的条痕を残すもので、825・826は口縁部がやや肥厚する。828は口縁が内湾する。829～831は口縁端部を肥厚させ突帯状とする粗製の深鉢である。832～835は底面に組織痕の残る底部片で、832は布目、833～835はアンギン編みの圧痕が残る。

XIII類、その他不明な土器、底部片、土製品を一括した。836～839は口唇部にねじり紐状の突起が付く、840・841は口唇部に斜位の刻みを施す。841は口縁部に棒状工具の押引による沈線を施す。842～844は口縁部に曲線的な沈線を施す。842は沈線間と口唇部外側に貝殻腹縁の押圧を施す。843はS字状の沈線を連続して施していると思われる。845は口縁部が屈曲し、外開きし、外面に対向する斜位の沈線を施す。846は口縁部が内面方向へ断面三角形を呈し、口縁外面上下に縦位の短沈線、その間に斜位の沈線を施し、施文部位以下は削りが施される。847はわずかに内湾し、口唇部が平坦、外面に、非常に浅い沈線が縦、横に施される。848は口縁がやや外反する口縁部がわずかに肥厚し、外面に貝殻腹縁刺突と、粘土紐貼り付けの飾りを施す。849は胴部片で幅広の突帯を作り、中央をやや太めの沈線で区画し2条の突帯の様に仕上げ、突带上に貝殻腹縁の押圧を施す。850～853は口縁部に沈線を施す。850は沈線で長方形の区画を作り、その中に横位の沈線を施す。851は沈線間に竹管状の工具で連続刺突を施す。852は3条の沈線間にヘ

ラ状工具で2段の連続刺突を施す。853は沈線間の幅が広く、その中に縦位の沈線を連続して施す。854は口縁が外反し、口唇部が外に向く、そこに2条の沈線を廻らし、その両側に刻みを施す。口唇部下位にも数条の沈線が廻る。855は口縁部が外反し、口唇部が平坦で、口唇部に沈線を廻らし、その両側に刻みを施す。856は口縁部が肥厚し、口唇部と肥厚した口縁に沈線を廻らし外面沈線の上下に連続刺突を施す。857は口唇直下で外反し、口唇部に沈線を廻らせ、その両側に羽状に刺突を施す。口縁内外両面に沈線を施し、内面にはヘラ状工具で刺突を行い、外面には不規則な刺突を施す。858は口唇部に羽状の刻みを施し、外面に沈線が廻る。859は口縁上端にわずかに貝殻刺突が確認できる。860は口縁部がわずかに外反し、口縁部に貝殻腹縁刺突が施され、その下でわずかに段を有する。861は頸部で外反し口縁部がわずかに肥厚する。口唇直下に沈線を廻らせ、その下に左右対称に弧状の沈線が施され、その横にはさらに沈線が廻ると思われる。862は橋状把手部の一部と思われる。口唇附近に波状の沈線を施す。863・864は波状口縁の波頂部である。863は口縁部は突帯貼り付けによりわずかに肥厚し、斜方向の条痕を残す。864は口縁部が小さな断面三角形を呈し、波頂口唇部とその下位に棒状工具による刺突を施し、口縁部外面の刺突部から2条の沈線が廻る。口唇部には斜位の刻みも施される。865～867は口縁部がわずかに外反し、肥厚するもので外面に貝殻腹縁による斜位の刺突、羽状の刺突を施す。868は口縁部が外反し、肥厚し外面に3条の沈線を廻らし、その間に大きめな貝殻腹縁刺突を施す。869～871は口縁部がやや内湾し、869は口縁部が波状を呈するものと思われ、口唇部に縄文、外面に貝殻腹縁刺突を施す。870は口縁部が肥厚し、縦位の粘土紐貼り付けを行なう、そこを沈線で縦位に2分割し、さらに横位の刻みを施す。口縁部文様は貝殻腹縁刺突が主でわずかに沈線も確認できる。872・873は小破片で傾き等はっきりしないが口縁部がL字に折れ、そこに沈線と縄文を廻らせるものと思われる。沈線内には赤色顔料が残存する。874は口縁部がわずかに外反し、外面に刺突から始まる沈線が施される。875・876は口縁部が外傾し、口唇部が小さな断面三角形になり、そこに棒状工具で連続刺突を施す。877～879は口縁部がわずかに外反する器形を呈し、877・878は口唇部に刻みを施す。879は全くの無文である。880は波状口縁、口縁はわずかに肥厚し、無文である。881～887は無文の口縁部で、881は波状口縁となる。882・883、885は小さな突帯を廻らせ、口縁断面三角形を呈する。884、886・887は口唇部のみが断面三角形を呈すると解した。888～890は器面にヘナタリの観察できるものである。891は器壁が薄く、縦位の凹線を施す。892・893は胴部片で892は沈線を斜方向に縦に施す。893は非常に細い沈線で菱形格子が施される。894～910は平底から若干上げ底になった底部片である。911～921は圧痕のついた底部片である。911～915、917・918、921はスクレ状圧痕、916はモジリ編みによるカゴ類の圧痕、919は平編みによる圧痕、920は綾編みによる圧痕と思われる。922～946は円盤状土製加工品で922は阿高式土器の突起部、923～927は市来式土器、928・929・931は磨消縄文系の土器、930は阿高系の土器を利用している。944～946は中央に穿孔を施す。

XIV類、947～953、955～993は皿部片で947～953、955～960は上面觀が4角形を呈すると思われ、961～993は平面觀が円形を呈すると思われる。971～974はW字状を意識したような粘土紐貼り付けがみられる。954、994～1046は脚部片である。994～1034は沈線、刺突、貝殻刺突を文様の主体とする。1041～1046は沈線と縄文を文様として施す。